

坂町 災害·復興記録誌





の救援・救助、捜索にあたっていただいた警 復旧期までの一番重要な初動期に、被災者

消防、自衛隊、医療関係機関。応急復旧

の御尽力もいただき、令和6年3月末で、

に心から御見舞い申し上げます。

こうした未曾有の災害に見舞われ、

なす

べも限られていた中、発災直後から応急

表しますとともに、被災された多くの皆様

犠牲になられた方々に心より哀悼の意を

方が行方不明となっております。

方がお亡くなりになられ、今もなお1名の 害を引き起こし、災害関連死を含む21名の かに超える猛烈な雨が、わずか3日間で降 害は、平年の7月1カ月分の降水量をはる

町内各地で大規模な土砂災害や浸水被

平成30年7月6日に本町を襲った豪雨災



坂町水害碑 坂町自然災害伝承公園

令和3年3月 建立

土砂災害による未来の坂町で

一砂災害による犠牲者が

一度とでないように

私たちは伝えていく、

や浸水被害が発生し、多くの方が犠牲になられました。

平成30年7月豪雨では、町内各地で大規模な土砂災害

この豪雨災害の経験を踏まえ、災害について将来にわ

めに、この水害碑を建立しました。

めの取り組みとして、災害の記憶を後世に伝えていくた ら得られた教訓を将来に伝承し、災害を風化させないた たって伝えていくことが重要であると考え、豪雨災害か

坂町長 吉田 隆行

発刊にあたって

災害坂町復旧・復興プラン」を策定し、「が 旧・復興を速やかに進めるため、本町では令 ことを、ここに改めて深く感謝と御礼を申 ど、多くの物的・人的支援をいただきました 方々、全国各地から届けられた支援物資な 係機関。住民の生活再建に携わってくださっ 和元年をスター た26,000人を超えるボランティアの んでまいりました。国・県をはじめ関係機関 一丸となって復旧・復興事業に全力で取り組 んばろう!!坂町」を合言葉に、 し上げます。 作業に当たってくださった国や県、自治体関 多くの皆様の御支援のもと生活再建と復 トとする「平成30年7月豪雨 町民の皆様と

> もおかしくない」という緊張感と「災害対策 災から復旧・復興に関わっていただいた地元 舵を切り、「災害から復興し、みんなにやさ 後は、復旧から「本格的な復興へ」と大きく 行政(公助)が三位一体となって、平時から 取り入れながら、住民(自助)、地域(共助)、 にこれで十分ということはない」という認識 としております。改めて「災害はいつ起きて 貴重な証言や教訓を後世に伝えていく内容 の方々、国・県並びに関係機関の方々からの 記憶にとどめ、坂町の地形地質などに基づ 旧工事については概ね完了の運びとなり、今 の実践的な取組を続けていくことに役立て を町民の皆様と共有し、より最新の知見も 意のもと、豪雨災害の実情を正確に記録し 暮らせるまちづくりを推進して参ります。 層加速させ、災害前よりも安全で安心して く土砂災害のメカニズムを明らかにし、被 しいまち坂町」の実現に向けた取組をより よる犠牲者を二度と出さないという強い決 この「坂町災害・復興記録誌」は、災害に

挨拶といたします。 関の皆様に心から感謝申し上げ、 御協力くださいました方々、並びに関係機 本誌の作成にあたり、 取材や資料提供に 発刊の御

ていただければ幸いです。



坂町 災害・復興記録誌

「伝承」

平成三〇年 七月の記憶

はじめに

7-15 第1章 「記録」

坂町における過去の災害

17-23 第2章 「土砂災害のメカニズム」

平成30年7月の気象状況と土砂災害の発生

25-49 第3章 「平成30年7月 坂町」

想像できなかった甚大な被害

51-61 第4章 「伝える言葉」一体験・証言一

甚大な被害が発生 その状況を伝える

63-69 第5章 「救援・復旧」

協力機関への感謝

71-75 第6章 「被災後の町民の暮らし」

困難を乗り越え復興に向かう

77-91 第7章 「復興」

前よりも輝くまちへ がんばろう坂町!!

93-102 第8章 「伝承」

伝えていく、日々の備え、命の大切さ





「記録」

坂町における過去の災害

月の災害以前にも、二つの「水害碑」が

私たちの住む坂町には、平成30年7

SAKA town 坂町 災害・復興記録誌

明治40年(1907)小屋浦地区 の被災状況を伝える2枚の写真

再び、まちを埋め尽くしました。 平成30年7月豪雨により、

だったのでしょうか?どのようなもの明治40年の豪雨は、

ちが記録されています。この災害は坂町内で、残る写真には土砂によって覆われた小屋浦の 人もの尊い命を奪いま



坂町教育委員会 所蔵



平成30年(2018) 土石流により埋もれた天地川

記

坂町における過去の災害

進めてきた多くの防災インフラの整備 かったこと、また、想像を超える規模 など、それらを過信し、避難が出来な で災害が発生したこと、悔恨を感じざ

も住みやすいまちにしていきます。坂町は、復旧・復興を果たし、前よ そして、災害の記憶を必ず未来へ伝

| できたのでしょうか?| 私たちは受け取ることが

同じ悲しみを繰り返さないようにと伝 もに、未来に生きる人たちに対して、

えてくれていたものです。

が、その被害の大きさを記録するとと

過去、大きな痛手を負った先人達



2 小屋浦地区

小屋浦地区 天地川の災害を伝える水害碑と報恩の碑 (小屋浦四丁目 坂町自然災害伝承公園内)

坂地区 総頭川の災害を伝える水害碑 (坂東二丁目 八幡山八幡神社内)

明治40年

の方が犠牲になりました。

水害碑に刻まれた明治40年の豪雨で町内46人

「泥の海」「湖水」のようだと伝えられ、

流出、 一帯が

破損した家屋12戸・田畑の浸水は20町歩

坂地区でも総頭川の堤防が決壊し、

犠牲者は小屋浦地区に集中しています

ル)あり

大正12年 (1923) の豪雨被害を伝える中国新聞 7月14日掲載

慘狀目 村泥

目常でられずを民家等倒して

と化す

の堤防

坂町内で起こった土砂災害 (大正~昭和の主なもの)

大正12年(1923)7月12日豪雨

集中豪雨により、総頭川が氾濫、天地 川に土石流が発生、坂町で10人の犠牲 者が出ました。

この年は9月 関東大震災に襲われた年 でもありました。

昭和20年(1945)9月17日枕崎台風

原爆投下から間もない9月17日 大型の 台風が日本を縦断。

広島県全体では、死者・行方不明者あ わせて2,000人を超え、坂町でも5人の 犠牲者が出ました。

昭和40年(1965)6月19日~20日豪雨

温帯低気圧の接近により県西部を中心に 豪雨災害が発生。坂町で2人の犠牲者が 出ました。

提供:中国新聞社

因もあり、豪雨の時は、充分な注意が必要

坂町の自然的特性(地形や地質など)の

を受けています。

であるということが、過去の災害からわかり

大正12年にも大きな土砂災害が坂町を襲っています

人々が忘れ た頃

それでも繰 まちを襲う豪雨 工砂災害 坂町は過去数回にわたり土砂災害 返 一の被害

被害を伝える広島芸備日日新聞 明治40年 (1907) 7月19日

小屋浦水害碑の碑文(現代語訳 部分)

明治40年(1907)7月15日に大雨が降 り、二本の川(総頭川、天地川)が氾濫 した。

氾濫は唐突に起きたため、人々は逃げ る暇がなかった。被害が大きかったのは そのためである。

雨が止み、水が引いた後の河岸には 家々はなく、一面見渡す限り土石流で埋 め尽くされた。

岩の間には壊れた食器類や道具類が 散乱し、折れた梁や柱が土砂に埋没し、 海面に漂っているだけである。

この土石流が起こる前、長雨が十何日 も降り続き地盤が緩んでいた。そこに短 時間の集中豪雨がおきたために崖が崩れ て川をせき止め、水の勢いが増し、土石 流を引き起こしたのである。

土石流は山裾を震わし巨岩を転がし、 大木をなぎ倒しながら猛烈な勢いで大地 を浸し流れていった。

土石流によって流された家屋、溺れ死 んだ人や家畜は数え切れないほどだっ

(以降、復旧復興に奔走した菅田茂四郎村長の 功績をたたえるものになっています。)

訳:広島県内における水害碑の碑文資料 (広島大学総合博物館研究報告2016年 12月 熊原康博氏らの論文から抜粋)

平成30年7月豪雨の被害と、明治40年7月の 水害には多くの共通点が見られます

土砂や流木が川

土

堰き止めて氾濫を起こし、 さらに、

や家屋に大きな被害を出して たという人が多く出てしまう しまいます。 右流は住宅地に到達し、 は、豪雨が突然起きるため 避難行動が間に合わなかっ 住民

だと考えられます。

多くの水が含まれます。 限界」という状態に達しやす と山の斜面は「土砂災害発生 その状態で、豪雨が起きる 夏の長雨が続くと、 多数の土石流が起こり得 山には





被害を知る ろん私も祈るような気持でした。 誰もが、 お悔や そう思ったでしょ 胸が締め

もたちの30年後、50年後今も素敵なまちですけ

50年後の坂町が、キラっですけれど、あの子ど

たいと思います。

私も、これから防災につ

11

て、

今回、

あたたかい方々です。

んだことなどを暮ら

しに活かして

61

き

亡くなられた方やそのご家族には心よ を映像に つけら ħ ました。

と光り

輝く町になる

第 章

記録

すことも多いです 広島は、 広島で生まれ、 美し い海も川も 育ち、 今も実家で過ご 山もある大好

8月の豪雨では大き 報を伝える天気予 平成30年のあの なふるさとです が心配で、 O北区も平成 きび

私の生

あのような被害は二度とおきて な被害を受け 26

域です

もう、

うし、 大変な

ほしくない

らの暮らしに活かしていく んでもお役に立てたのならうれし 今回のビデオで、 また、子どもたちに、学んでもらう。 私が案内役として、

私が大好きな広島の優し皆さんや先生方とお話も出 時間で たが、 優し、 坂町 くて、 σ 小学校 素直 いで

わず

な

坂町防災教育ビデオで 案内役をつとめた

くないと

●俳優/広島県安佐北区出身

平成30年7月6日夜の豪雨の際、災害発生後でも避難しなかった人 (全体の59% 371人)へ聞いた「避難しなかった理由」 ※複数回答 100 150 200 (人) 被害に遭うとは思わなかったから 176 災害にあったことがなかったから 176 避難する方がかえって危険だと思ったから 122 いざとなれば2階などに逃げればよいと思ったから 近所の人は誰も避難していなかったから 104 雨の降り方や川の水位から安全と判断したから 61 すでに危険な状況になっていたから 57 避難場所での滞在が不安だったから 31 テレビやインターネットの情報から安全と判断したから 22 住民福祉協議会など誰からも避難をすすめられなかったから 21 自宅以外の安全な場所にいたから 15 避難勧告や避難指示が出たことを知らなかったから 15

その他

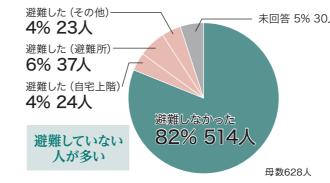
住民に対してアンケ 坂町では平成30年の災害後 -成30年7月 れからも、 考え続けない の豪雨で、 を行っていま とい 大きな被害を出 け ない課題です してしまったのか?

坂町民へのアンケート結果から見る避難行動への意識

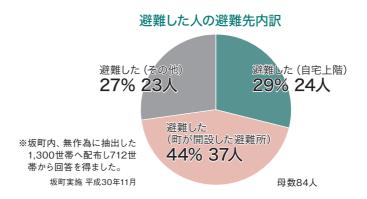
坂町内、無作為に抽出した1,300世帯へ配布し、712世帯から回答を得ました。坂町実施 平成30年11月

アンケートに見る避難状況

7月6日19時(災害発生)までの避難行動の有無



※構成比は小数点以下を四捨五入しているため、100%にならない



避難しなかった理由には、「被害に遭うと思わ なかったから」(55.0%)、次いで「災害にあったこ とがなかったから」(47.4%)と回答した方が多く、 住民の多くに「自分の住む場所は大丈夫(安全) だろう | という意識があったことがわかります。

一方で、「避難する方がかえって危険と思ったか ら」(47.4%)、「既に危険な状況になっていたか ら」(15.4%)と回答した方も多く、夕方から急激 に強まった降雨により、家の外が既に危険な状況 となり避難場所への避難が難しかったことも推測 できます。

また、「避難場所での滞在が不安だったから」と の回答も一定数(15.1%)存在し、避難所での生 活への抵抗感・負担感が避難を妨げる要因の一 つとなっている実態も伺えます。

大きな災害が発生しはじめた6日19時の時点で、 82%もの人が避難していませんでした。

避難した人の中にも自宅での上の階に移動した という人も多く、安全な場所に移動された人は町 が開設した避難所37人、その他23人と限定的で あったことがわかります。

13







「土砂災害のメカニズム」

平成30年7月の気象状況と土砂災害の発生

18

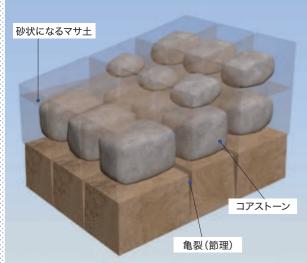
山地に存在する土砂災害の要因

日本の花崗岩には亀裂(節理といいます)が生じることが多く、この亀裂沿いに風化が進みま す。花崗岩には、砂状になるマサ土と、固く風化が進まない芯のような部分があり、芯の部分は 「コアストーン | と呼ばれます。

地表や地表近くにあらわれた「コアストーン」は、豪雨や地震などで山地下に転落することもあ り、土石流の先頭になり、まちを襲うことも多くみられます。

近年、国内各地でまちを襲う線状降水帯による豪雨と、コアストーンなどによる大規模な土石流 は、密接な関係があるといえます。

坂町復旧・復興プランで進められた砂防堰堤の設置は、平成30年7月と同様の豪雨があっても、地 区を守れるように計画されましたが、それでも特に土砂災害危険箇所などでは充分な注意が必要です。





坂町の山に多くのコアストーンが見られる



平成30年7月豪雨の際、まちを襲ったコアストーン

土石流



平成30年7月豪雨災害時、土石流の現象(小屋浦地区)

山腹、川底の石や土砂が長雨や集中豪雨など によって一気に下流へと押し流されるものをいい ます。その流れの速さは規模によって異なります が、時速20~40kmという速度で一瞬のうちに 建物や畑などを破壊します。

平成30年、坂町で見られた土石流では、巨石 や流木が多く混ざり、まちを襲いました。

がけ崩れ

土石流、

が け

ま崩



平成30年7月豪雨災害時、がけ崩れの現象(横浜地区)

地中にしみ込んだ水分が土の抵抗力を弱め、 雨や地震等の影響によって急激に斜面が崩れ落 ちることをいいます。

がけ崩れは、突然起きるため、家の近くで発 生すると、逃げ遅れる人も多くなります。

坂町では横浜地区の斜面において、大規模な がけ崩れが発生しています。

コアストーン

引豪山 nき金になる? ※雨で土石流彩 なることもあり 発る生コ 0 ス ます

坂町の自然的特性と土砂災害

美しい瀬戸内海と緑豊かな山地によって織りなされる坂町の地形。

私たちにとって財産ともいえる自然環境ですが、このまちが持つこうした環境が、豪雨や台風の際、危険を伴う恐れが あります。

この章では、その自然的メカニズムについて考察します。

坂町の地形

小屋浦地区の地形



坂町は、北は広島市に南は呉市に接し、山地が 海岸まで迫る形の地形となっています。

坂地区、植田地区、水尻地区、小屋浦地区など では、河川の下流域が扇状地となっており、その部分 に住宅地が分布し、山裾付近や渓流下流部に土砂 崩れや土石流の危険がある区域が多数存在します。

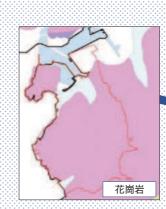
坂地区・横浜・植田・水尻地区の地形

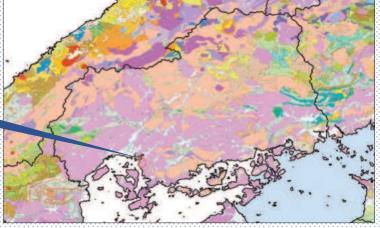


平成21年(2009)4月 空中写真 出典:国土地理院ウェブサイト (2枚とも)

坂町の土質

覆われて「マサ土」 「マサ土」 いいを ま土いる坂町のおけ





広島県の山地は、主に広島花崗岩といわれる岩石から出来ています。この岩石は、長い間、雨や風にさらされると「マ サ土」と呼ばれる砂のような土に変化していきます。この「マサ土」は、水を含むと非常にもろくて崩れやすい性質を持って います。

このため、斜面の表面を「マサ土」が広く覆う広島県では、土石流やがけ崩れなどの土砂災害が起きやすいのです。

梅雨前線が影響

未曾有

の災害をもたらす

大量の水蒸気を含む一

降り始めからの雨量と1時間雨量

坂町における7月5日からの雨量

6日昼過ぎから7日朝にかけての大雨

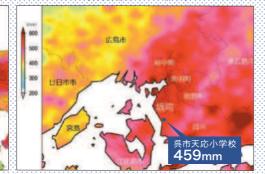
1時間に20ミリ以上の強い雨、また降り始めからの雨量が100ミリを超えると、土砂災害が発生しやすいといわれています。 平成30年7月、坂町では7月5日9時頃から7日まで雨が降り続けました。6日18時に時間雨量が20ミリを超え、降り 始めからの雨量も100ミリを超えていました。さらに、この値は大きく増していくことになります。

坂町における雨量観測データは坂小学校の観測所が6日19時に欠測したため、これ以降、記録されていませんが、近 隣の呉市天応小学校の観測データから推測すると20時台も50ミリを超える雨量があったと考えられ、この夜、坂町内の 多くの箇所で土砂災害、洪水が起こっています。町内の多くの被害は、19時頃から発生しています。

雨量分布図 (平成30年7月5日00時~7月8日24時)

提供:広島地方気象台 (解析雨量を基に作成)

(アメダスを基に作成)



解析雨量とは、レーダーと雨量計による、 の細かさで解析した降水量分布

7月5日からの3日間の

雨量分布図から広島県 の大部分で300ミリを超 え、坂町では440ミリを 超えていることがわかりま

坂町に隣接する呉市の 天応小学校の観測所では 459ミリを記録しました。

7月6日 1時間雨量

「土砂災害のメカニズム」

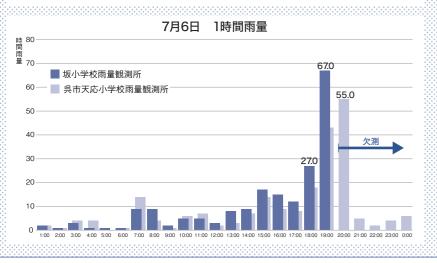
1730	/ H I I I I	J -0 113 <u>-</u>							坂小学	校雨量観	測所:広	島県管理
時間	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00
雨量	2.0	1.0	3.0	1.0	1.0	1.0	9.0	9.0	2.0	5.0	5.0	3.0
時間	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00
雨量	8.0	9.0	17.0	15.0	12.0	27.0	67.0			欠測		

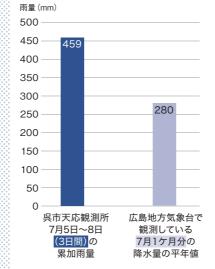
7月6日18:00~19:00の時間帯に67.0mmの降雨が観測されました。(19:00以降は、欠測したため記録なし。)

参考:呉市天応地区1時間雨量(7月6日)

							共印大心小子校府里観測別・広島県官場					
時間	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00
雨量	2.0	1.0	4.0	4.0	0.0	1.0	14.0	4.0	1.0	6.0	7.0	2.0
時間	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00
雨量	3.0	7.0	14.0	9.0	8.0	18.0	43.0	55.0	5.0	2.0	4.0	6.0

19時以降の雨量は、観測所の欠測のため不明ですが、呉市天応小学校の観測データなどから、20時 台も相当な雨量があったと推測できます。





広島地方気象台で観測している 7月1カ月分の降水量の平年値が 280ミリですから、わずか3日間で これを超える猛烈な降雨があった ことになります。

平成30年7月 豪雨災害の気象

7月5日から8日にかけての西日本を中心とした記録的な大雨は、大量の水蒸気を含む二つの気 流、梅雨前線が影響し合い発生しました。その状況は、以下の3点によるものです。

- (A) 多量の水蒸気を含む2つの気流が西日本付近で持続的に合流
- (B)梅雨前線の停滞・強化などによる持続的な上昇流の形成
- (C) 局地的な線状降水帯の形成

坂町で見られた猛烈な豪雨は(C)によるもので、発生した線状降水帯の中には、形成過程として バックビルディング型(次々に積乱雲が形成されていく現象)の特徴もあり18時台から20時台をピー クに豪雨をもたらしました。

豪雨は、西日本を中心に広い範囲で起こり、総降水量は多いところで1,800ミリを超えています。 この豪雨による河川の氾濫、土砂災害等で、日本国内における被害は、死者237名、行方不明 者8名に及び、平成に入って最悪の人的被害となったほか、家屋の全半壊は約18,000棟、浸水家 屋は約28,500棟に達しました。気象庁は、平成30年6月28日から7月8日に発生したこの豪雨につ いて「平成30年7月豪雨」と名称を定めました。

「参考にしたもの」気象庁発表:「平成30年7月豪雨」及び7月中旬以降の記録的な高温の特徴と要因について (平成30年8月10日)下の気象要因図を含む

内閣府発表: 平成30年7月豪雨による被害状況等について(平成31年1月9日)

(の密車へ進み、円 オホーツク油 高気圧 (A)東シナ海におし 太平洋高気圧

7月5日から8日の 記録的な大雨の気象要因

雨雲の3次元構造動画より

比較的背の低い積乱雲が、次々形成されていくバックビルディング現象が起きている





地図情報は国土地理院地図 気象庁Cバンドレーダおよび国土交通省XバンドMPレーダデータを合成

提供:防災科学技術研究所

避難所の開設

「土砂災害のメカニズム」



坂町では、15時に発令した「避 難準備・高齢者等避難開始」の発 令と同時に、坂地区・横浜地区・小 屋浦地区のそれぞれにおいて避 難所を開設。

その後、緊急的に避難所を増やしました。

※避難者数が最大になったのは、7月 7日午前5時で、1,353人です。 (坂町災害対策本部が把握した人数)

背景図 出典: 国土地理院撮影の空中写真 (平成20年撮影) を加工して作成

7月6日 Sunstar Hall (サンスターホール) の様子





降り続く雨、強烈な雨の中、避難情報が発令されました

避難情報の発令状況

気象台は7月6日5時40分大雨警報を発表。その後も断続的に降雨が続いたため、坂町では6日15時00分に指定避難場所を開設し「避難準備・高齢者等避難開始」を発令。

続いて17時35分の土砂災害警戒情報発表(気象台)を受け17時40分に「避難勧告」を発令。6日夕方から急激に雨脚が強まり19時40分には、坂町で、はじめてとなる大雨特別警報が発表され、ただちに「避難指示(緊急)」を発令しました。 ※大雨特別警報とは、警報の発表基準をはるかに超える現象が予想され、重大な災害が起こる恐れが著しく大きい場合に最大限の警戒を呼びかけるため発表するものです。



避難情報の発令対象

区分	世帯数	人口		
坂地区	1,185世帯	2,705人		
横浜地区	872世帯	1,928人		
小屋浦地区	480世帯	1,048人		
合 計	2,537世帯	5,681人		
横浜地区	872世帯 480世帯	1,928人		

防災無線による放送内容(代表例)

7/6 17:40 避難勧告発令時

緊急放送・緊急放送・避難勧告発令。

こちらは坂町です。

坂町に土砂災害警戒情報が発表されました。

土砂災害の危険性が極めて高くなっています。

町内の土砂災害警戒区域等、または土砂災害危険個所の区域 にお住まいの方に避難勧告を発令しました。

該当区域にお住まいの方は、ただちに、町民センター・サンス ターホール・坂中学校武道館・小屋浦ふれあいセンター・安芸 クリーンセンターへ避難してください。

7/6 19:40 避難指示(緊急)発令時

緊急放送・緊急放送・避難指示(緊急)発令。 こちらは坂町です。

広島県に大雨特別警報が発表されました。

町内全域に避難指示(緊急)を発令します。

ただちに、町民センター・サンスターホール・坂中学校武道館・ 小屋浦ふれあいセンター・安芸クリーンセンター・上條集会所・ 町立図書館へ避難してください。

また、外が危険な場合は、山から遠い2階の部屋へ屋内避難してください。



「平成30年7月坂町」

想像できなかった甚大な被害

水道

豪雨により上條地区、植田地区、小屋浦地区において最大で約1,300世帯が断水しました。上條地区、植田地区に おいては、約500世帯が断水し、7月16日に全ての世帯の断水が解消されました。小屋浦地区においては、約800世帯 が断水し、このうち、約600世帯については管路の復旧により7月15日に断水を解消、残る約200世帯については、道 路の土砂撤去作業の進捗を踏まえて仮配管の整備等を行い8月10日に断水が解消されました。

断水中は、広島市水道局や自衛隊により給水活動が実施されました。また、24時間利用可能な給水所を役場と町民 センターに設置しました。

道路等・公共土木施設被災箇所

国道31号・広島呉道路(クレアライン)

国道31号では浸水により身動きがとれない車両が相次ぎました。また、広島呉道路が崩壊し、国道31号に大量の 土砂が流れ込み、坂地区から小屋浦地区への道路が寸断されました。飲料水等の物資等は、船輸送で実施しました。

公共上木施設被災箇所(災害査定を受けた箇所)

区分	広島県 管理箇所	坂町 管理箇所	合計	
河川	1箇所	25箇所	26箇所	
砂防設備	48箇所	0箇所	48箇所	
急傾斜地崩壊防止施設	1箇所	0箇所	1箇所	
道路	1箇所	130箇所	131箇所	
橋梁	0箇所	7箇所	7箇所	
下水道	0箇所	15箇所	15箇所	
合 計	51箇所	177箇所	228箇所	

IR呉線は三原駅-海田市駅間で不通となり、再開したのは、坂駅-海田市駅間が8月2日、坂駅-呉駅間が9月9日 でした。その間、代行バス(7月21日~:広駅-広島駅、8月2日~:坂駅-呉駅間)が運行されました。

学校

横浜小学校は7月11日から再開、坂中学校は7月17日から再開しました。坂小学校及び小屋浦小学校は7月13日まで 臨時休校、その後、再開することなく夏季休業に入りました。

坂小学校

校舎:床上浸水 体育館:床上浸水 グラウンド: 土砂流入、総頭川等の 堆積土砂の仮置き場となりました。

小屋浦小学校

プール: 土砂流入 グラウンド:土砂流入、災害廃棄物 の仮置き場となりました。

保育園

小屋浦みみょう保育園が全壊したた め、発災直後から0歳~2歳児は、子育 て支援センター小屋浦パオちゃんルー ム、3歳~5歳児は、坂みみょう保育園 で保育を実施しました。

また、平成30年10月からは、小屋浦 小学校の教室を利用して保育を実施し ました。

■ 主な公共施設等

Sunstar Hall	一部床上浸水・エレベーター故障
坂公民館	一部床上浸水
コミュニティーホールさか	一部床上浸水・エレベーター故障
保健センター	一部床上浸水
リサイクルセンター坂	全壊
公園(都市公園・児童遊園地)	都市公園10公園・児童遊園地2公園
ふるさと自然のみち	道路崩壊・舗装破損
小屋浦分団 消防格納庫	全壊

平成30年7月6日金曜日 ぞれぞれの週末を過ごすはずだった夜。 豪雨がまちの姿を一変させ、大切な人を失う。家屋を失う。 そして、長く爪痕を残す災いが起きた。

平成30年7月豪雨 坂町全体での被害

土石流、がけ崩れにより、町内200カ所以上で、道路、河川などが被災しました。

また、大量の土砂、流木などが橋梁で堰き止められたため河川の水が市街地に流入し、広い範囲で浸水被害が発生し ました。

坂町では災害関連死を含む21人が犠牲になり、1人が行方不明となっています。全壊となる被害を受けた建物は297件、 大規模半壊は485件、半壊は507件に及びました。このため多くの町民が避難所生活を強いられることになりました。

人的被害(令和5年12月14日現在)

	区	分	人数	備考
2	死者	直接死	16人	小屋浦地区15人、坂地区1人
	火 伯	関連死	5人	
	行方不明者		1人	
	負傷	場者	12人	重傷4人、軽傷8人

建物被害(令和3年3月1日現在)

11 1 A # 256			נא וונו אניי
坂地区	横浜 地区	小屋浦 地区	合計
79件	24件	194件	297件
159件	10件	316件	485件
345件	19件	143件	507件
28件	5件	4件	37件
4件	2件	7件	13件
21件	3件	8件	32件
97件	9件	3件	109件
2件	0件	2件	4件
13件	5件	3件	21件
64件	10件	25件	99件
27件	7件	3件	37件
839件	94件	708件	1,641件
	79件 159件 345件 28件 4件 21件 97件 2件 13件 64件 27件	水地区 地区 79件 24件 159件 10件 345件 19件 28件 5件 4件 2件 21件 3件 97件 9件 2件 0件 13件 5件 64件 10件 27件 7件	vvuo 地区 地区 79件 24件 194件 159件 10件 316件 345件 19件 143件 28件 5件 4件 4件 2件 7件 21件 3件 8件 97件 9件 3件 2件 0件 2件 13件 5件 3件 64件 10件 25件 27件 7件 3件

合計 1,641件

各分野に大きな被害が発生が町民の生活に大きな影響を与えました。

電気

豪雨による道路や河川の崩壊、十石流等の影響により雷柱の倒壊等が発生し、広範囲において停電が発生しま した。

停電は、7月6日19時30分頃から坂東地区、坂西地区、水尻地区、小屋浦地区で延べ約1,300戸に及びました。 停電の解消は、7月12日17時38分でした。(最終の停電の解消地区は、水尻地区でした)

※停電の解消とは家屋が流出・倒壊しており、当分の間、電気の使用見込みが立たない状況であることが確認できている利用者を除

19時56分 サンスターホールから国道に向かう車載カメラ映像 総頭川から泥水があふれ始める

刎条 坂東二丁目









避難を足止めて 7月6日 夜

19時56分頃、総頭川の水位が上がり氾濫を起こし、

平成30年7月豪雨の被害

7月6日19時30分頃、総頭川の本川や明神川など支川の上流部で土石流が発生。 土砂や流木が洪水とともに流れる「土砂洪水氾濫」の状態となり、下流域の市街地を飲み込みました。 坂地区では死者1名、全半壊家屋も580棟を超える甚大な被害が発生しました。



出典: 国土地理院撮影の空中写真 (平成30年7月撮影) を加工して作成

坂地区①



広い範囲で土砂を堆積させた



7日朝の状態 氾濫した濁流が沿川を流れる



坂みみょう保育園前

西側・中村

坂西三丁目 坂東三丁目付近

人がゴロゴロと石が

西側、中村の山裾でも多くの土石流



土砂・流木などが総頭川を塞ぎ、濁流が周辺に流れ出た



6日夜の土石流に飲まれ川に落ちた車両

平成30年7月豪雨の被害

坂地区②

上條

坂西四丁目 坂東四丁目付近



土石流が護岸を破壊している



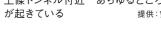
被災したリサイクルセンター坂

下流へと運んだ。 土石流は、大量の その破壊力は凄まじく道路や橋、 、大量の土石流や流木を総頭川上流部で発生した

総頭川上流から河口方向を望む



上條トンネル付近 あらゆるところで土砂崩れ 提供:安芸地区医師会





氾濫が引いて土砂・流木が残された

浜宮・平成ヶ浜

坂西一丁目 坂東一丁目 平成ヶ浜付近



浜宮地区 7日朝の時点で1mを超える 浸水があった



森浜から平成ヶ浜を望む



JR坂駅前 6日夜 立ち往生した車が残る



国道31号 呉方面が不通となり、平成ヶ浜が渋滞した



平成30年7月豪雨の被害

坂地区③

森浜・刎条

坂西二丁目 坂東二丁目付近



広島県「地域の砂防情報アーカイブ」より



6日19時過ぎから氾濫が起こり、避難所であるサンスターホールへの移動は難しかった



鯛尾の海岸線 谷筋から土砂が流れ込んでいる

POI

がけ崩れで閉じ込められた人の救出に向かう 提供:広島市消防局

がけ崩れが間に



がけ崩れにより崩れた斜面 7日朝 救出活動を続けるレスキュー隊が見える



35



山裾が崩壊 港一面が濁る

提供:広島市消防局

平成30年7月豪雨の被害

横浜地区

横浜・植田では急傾斜指定区域などで土砂崩れ、複数の渓流において土石流が発生。

幸いにして死者は出なかったものの、横浜・植田・水尻・亀石の地区全体で全半壊家屋50棟を超える甚大な被害が発生しました。

横浜では豪雨を受け7月6日19時頃から、地区の南の海岸に接する森山の急傾斜地の崩壊が起こりました。がけ崩れが家を襲い、一時、人が閉じ込められるなどの事態も起こりましたが、海田警察署、緊急消防援助隊、広島赤十字・原爆病院災害派遣医療チーム (DMAT)、消防団等の活動により救出されました。



出典: 国土地理院撮影の空中写真 (平成30年7月撮影) を加工して作成









山裾の住宅地を襲った土石流



被災した植田丘公園

土砂が覆う住宅・道路を値田地区上側で土石流が発生



海岸の工場も20cmの高さまで水に浸かったが、高潮用の土のうを積み設備を守った

平成30年7月豪雨の被害

植田地区

植田地区は山地の斜面の谷に形成した扇状地です。

豪雨により、急斜面で起きた土砂災害は、家屋、道路に大きな被害をあたえ、その被害は海岸の工場まで及びました。



出典: 国土地理院撮影の空中写真 (平成30年7月撮影) を加工して作成



植田三丁目 土石流が道路、家を襲う



土石流の直撃を受けた箇所の被害は大きかった



提供:広島県砂防課 7月7日撮影



水尻川の土石流がJR線路・国道31号を覆った



小屋浦地区住民が一時避難したホームプラザ ナフコ前も6日夜のうち 水尻駅付近 1mを超える土砂の堆積 に車は不通となった



提供:海田警察署

平成30年7月豪雨の被害 水尻・亀石地区

水尻地区では水尻川や上水落川において土石流が発生し下流の住宅地を土砂と洪水が襲い流出。土砂が国道31号に1m程度 の高さで堆積しました。

また、7月8日朝には山腹とともに広島呉道路が崩壊し、JR呉線・国道31号を巻き込みました。このことにより広島市-呉市間 の沿岸部の主要な陸上交通インフラがすべて途絶え、救護・復旧活動をより困難なものにしました。



出典: 国土地理院撮影の空中写真 (平成30年7月撮影) を加工して作成

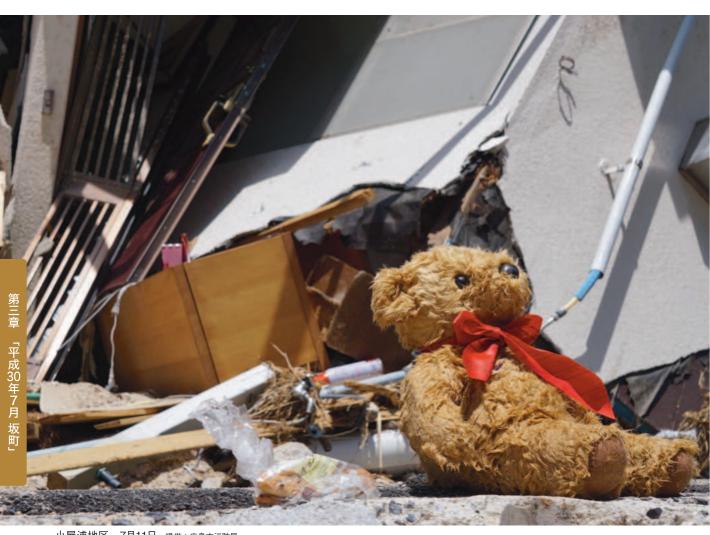


大量の土砂が国道・海岸まで流れ込む



上水落川上流 斜面が崩壊した





小屋浦地区 7月11日 提供:広島市消防局

大切にいとお が た日常 か が、



崩壊した広島呉道路 広島県「地域の砂防情報アーカイブ」より

7月8日、山腹とともに崩壊した広島呉道路。国道31号は区間7カ所に 土砂が流入し不通となりましたが、国土交通省広島国道事務所は被害の 大きかった水尻駅付近に迂回路(ベイサイドビーチ坂 駐車場)をつくり、 11日夜には通行可能にしました。

JR呉線(呉駅-坂駅間)は9月9日に運転を再開。広島呉道路も懸命な復 旧工事により9月27日全線で通行可能になりました。



坂南IC-天応西IC間の被災箇所



提供: NEXCO西日本中国支社 復旧工事中の広島呉道路 ベイサイトビーチ坂の迂回路の様子がわかる 提供:NEXCO西日本中国支社



防犯カメラに記録された氾濫・土石流

天地川公園近くに設置された防犯カメラは、19時33分頃、川が氾濫する様子を捉えています。

雨脚が激しくなるが歩行できた 避難を呼びかける消防団が映る(左映像 奥)





日が完全に暮れる 支流の水位が道路の高さに迫ってきた





19:33 激流が起こる 右映像では土石流が遊具を押し倒している





氾濫に流木などが混ざる 右映像では停めてあった車を押し流している

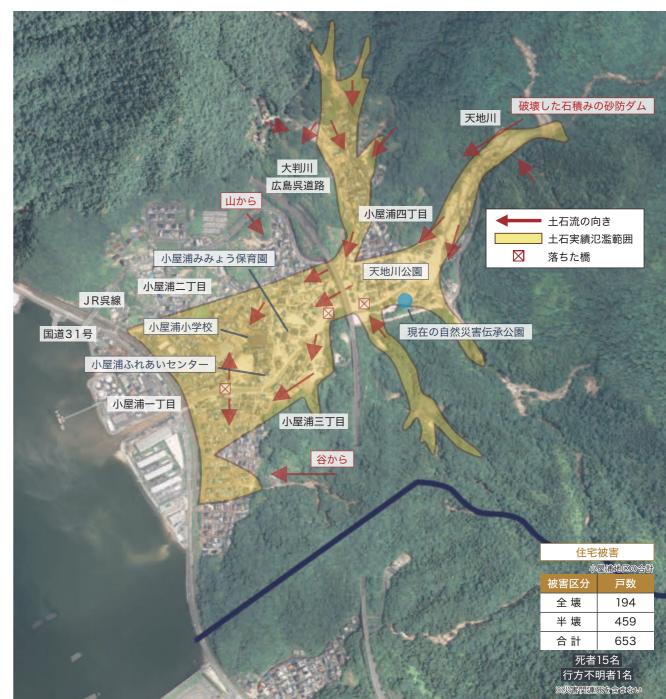




平成30年7月豪雨の被害 小屋浦地区①

小屋浦地区では6日19時25分頃から天地川の本川や小屋浦三丁目・四丁目の複数の支川で土石流が発生し、大量に流出 した土砂や流木が洪水とともに下流域の市街地を飲み込みました。

小屋浦地区は、死者15名(災害関連死を除く)、行方不明者1名、全半壊家屋も653棟に及ぶなど壊滅的な被害を受けま



出典: 国土地理院撮影の空中写真(平成30年7月撮影)を加工して作成

天地川上流をはじめ地区の数カ所で次々と土石流が発生。川が氾濫し、橋を落としました。 落ちなかった橋には流木などが堰き止められ周辺に土石流を広げました。

想像を超えた小屋浦の被害一夜明け、声を失った7日朝



四丁目の生活道にも土砂が堆積した



9日 水の流れが続いている

新宮社前



新宮社につながる宮前橋

平成30年7月豪雨の被害 小屋浦地区②





7月7日撮影 提供:広島県砂防課







発災から数日後の天地川 土砂・流木の撤去には時間が かかった

小屋浦みみょう保育園 土砂が堆積し使用不能に なった





小屋浦三丁目 山の谷から濁流が流れ込み 建物1階は、ほとんど浸水し た箇所もあった



平成30年7月豪雨の被害 小屋浦地区③

もっとも被害の大きかった小屋浦四丁目 天地川、大判川二つの渓流から土石流が発生しまちを襲い、多くの犠牲者が出 ました。



極楽橋 破壊を逃れた複数の橋に 土石、流木が引っかかっ ていた

提供:広島市消防局





第三章 「平成30年7月 坂町」



住宅地を襲ったコアストーン

提供:RCC中国放送

壊れた石積みの砂防堰堤 **天地川上流**





7日午前 電柱に掛けたロープを伝って避難した



提供:広島市消防局 7月11日撮影





7月17日 天地川から土石を取り除き護岸を修復する



7月18日 小屋浦小学校グラウンドに土砂・災害ごみが集められた



7月22日 落ちた天地橋を利用し、一輪車の清掃などを行っている



「伝える言葉」 -体験・証言-

甚大な被害が発生 その状況を伝える

坂地区

正原 利朗さん

中村地区住民福祉協議会 会長 (平成30年当時)

脅威を目の当たりにしたのは人生で初めてで らの伝え聞きです。私自身、これほどの自然の いますが、私たちはあくまでも当時を知る人か 大きな被害があったそうです。石碑にも残って 「明治40年に発生した大水害、この地区でも

正原池公園近くの自宅にいた。未明になり消防 正原さんは6日夜からの豪雨の際、中村地区



が体験したこの災害は、 消え去った過去の災害。しかし、自分たち しなければならない。 記録には残りながらも人々の記憶からは

驚きの光景をが明けて飛び込んできた 語り継ぎ、教訓と

地域のつながり避難と復旧作業に見た

域にかけての傾斜が、急か、なだらかだったか た避難場所、サンスターホールへと避難したこ で生じたのではないかという。 とが大きかった。被害の大小は、山から居住地 を察知した人がいち早く総頭川沿いに指定され 中村地区で人的被害が出なかったのは、異変

保して道路を埋め尽くした土砂を公園へと運 砂の撤去から着手した。まずは15人ほどで、あ ぶ。地域の中村公民館は、指定の避難場所では る限りの土のう袋を集め、軽トラックを2台確 7日には、地域の住民に声をかけ集まって土 たが幸い なことに被災を免れていたの

第四章 「伝える言葉」-体験・証言-

路は濁流の通り道となり歩けない。家屋の間を 神川沿いの地域に近づくと状況は一変する。道 被害はなかった。しかし、総頭川と合流する明 団とともに見回りした際、自宅周辺では大きな く手を塞いでいた。 縫う細い路地には1m以上の土砂が堆積して行

てしまう。自分たちでの救出はかなわず女性は 女性が一人で住む家に取り残されている。家に レスキュー隊員によって救助された。 入ろうにも柔らかい砂で腰あたりまでが埋まっ 上浸水の被害に遭った家庭を訪ねると、年配の 住民福祉協議会のリストをもとに、床下、床

> めた。 で、そこを拠点としてその日から炊き出しを始

村公民館で避難所から戻ってきた20数軒の住民 知人たちは食料や水、燃料など提供してくれ 持ってきてくれる家庭もあった。被災を知っ も収容、ボランティアの休憩の場にもなった。 うことができたので受け取ることができた。中 た。幹線道路は寸断されたものの、生活道は使 普段からの住民同士の付き合いが密である反 正原さんも自宅からも米を提供、野菜などを

せた。 は7月末。 面、高齢化が進む地域でもある。真夏の作業が 地域の復旧の原動力だった。住民自ら、連日休 むことなく取り組んだことで、道路の完全復旧 も、皆が率先して作業に加わってくれたことは いかに過酷だったかは想像に難くない。それで これからは、この地域の連携を、 8月には、 地域のほぼ全てを復旧さ 災害の伝

承、防災活動へと活かしていく





の大切さを

出来事

出来事

伝承し

7

V)

語

り継

1 で

52

坂地区

細川健さん

森浜地区住民福祉協議会 会長 (平成30年当時)

困難を乗り越えて復旧に取り組めたのは、

は想像を絶する浸水被害だった。悲しさ、

ほどの勢いになっていた。

を道案内する頃には長靴の中にも水が流れ込む

ひとりの命を失った森浜地区を襲ったの

かつての災害から立ち上がる人たちの姿を

思いながらだったと細川さんはいう。

家族の声で迫る危険を知る「土の臭いがする」

とは反対側の低いエリアへと流れ込む。 て濁流が走っていた。濁流は勢いを増し、自宅 扉を開けてみると、上方の住宅地から道に沿っ がする」との声。JR坂駅の南側を走る道路よ と思った矢先、家族から「お父さん、 く救急要請をした家があり、細川さんが救急隊 も4~5mほど高い位置に建つ自宅の玄関の 月6日、 夕方、 テレビで野球中継を見よう ・土の臭い いち早



となった町立図書館に住民を誘導した。

被害状況は、

山側の地域からの濁流が総頭川

難が危険と判断した細川さんは、

臨時の避難所

した。

-ルへの避

え間なく流れ込んだ。サンスタ

している状態になっていた。水は森浜地区に絶

駅前の国道31号、

JR呉線の線路すべてが水没

流を確認してからわずか1時間ほどで、

流れ降りてきた水は溜まる一方で、

自身

が濁

Ŕ 坂

に拡大させることになる。

かけて、さらに続いた豪雨は、その被害をさら

アに流れ込んでいた。6日深夜から7日未明に で川を堰き止め、行き場を失った水が住居エリ た。流されてきた流木や資材が呉線の線路手前 に一気に流れ込み、下流域の住宅は浸水してい

我々も頑張ろう多くの被災地が人の力で復旧した

悲しみと困難が襲った。 没した家屋もあり、一人が亡くなった。地域を 困難を極める。2階建ての1階部分が完全に水 急いだが、道路は川のような状態で移動にすら 細川さんは避難所に行き地域住民の安否確認を

浜地区の施設は水没状態。町役場近くの公園に を立ち上げることになるが、拠点となるべき森 も毎日10人以上が復旧作業に出てくれ、数十 テントを張り、そこを拠点とした。地域の役員 災害発生から数日後、ボランティアセンタ

> のボランティアと真夏の復旧作業に取り組ん そこからの障害は「暑さ」だった。

や東日本大震災など未曽有の自然災害でも、 ではあったが、かつて発生した阪神淡路大震災 いつ終わりを迎えるのかさえ分からない作業

進めた。改めて地域のつながりの大切さを痛感 人々の協力は復旧の原動力となった。 「だから我々も頑張ろう」と声を掛け合い歩を

細川さんは声をかける 命は、まず自分で守る行動をとってほしいと、 て、行政がすぐに動けるわけでもない。自分の なうものではない。 自然の力が引き起こす脅威は、 被害が起きたからとい 人間の力で



6日夜 自宅前の様子 濁流が押し寄せた

7日朝のニュースで被害の大きさを知った

誰も持っていなかった」という。 いていた。急傾斜地が崩れるという認識は、 地区には川がないから土砂崩れはないと聞

谷筋というか川のようになっている。

に上の山から岩と土石がすごい勢いで流れて、 さぁ、大変だと外に出てみると、斜面の生活道 う大きな音が聞こえ、皆、異変に気づいた。

この地区で長く暮らす大段さんは、「横浜

大段 文明さん

横浜一部地区住民福祉協議会 副会長 (平成30年当時)

豪雨の中、 どこからか岩が落ちてくる ゴロゴロという大きな

があまり気にしなかった。18時からの門徒の集 なかったと記憶している。避難勧告は出ていた まりで近くの寺に出かけた。 7月6日夕方、雨の勢いはまだそんなに強く

校まで送ってもらえた。海沿いの道も、

側溝か

らも、土砂が溢れ出ていた。

道を避け歩いていると消防団に助けられ、中学

車を走らせることは難しいので、

川になった

うことにした。

と声を掛け合って避難所である坂中学校へ向か

して自宅に戻った。濁流の勢いが弱まり、近所

これはとても歩けないと1時間をかけ遠回り

横浜地区

その日、奥さんは広島市に出掛けていたが、 市内に住む息子夫婦の家に身を

と不安の中、

一晩を過ごした。

およそ1

00人が詰めかけた体育館で、

暑さ

呉線が止まり、

翌朝、 崩落した横浜の斜面を見る

かった坂道には濁流はなく、岩をよけて歩いて

翌朝、雨は降っていなかった。昨夜通れ

な

被災した場所を見ると、山の斜面の墓所を挟

段々に重なった三世帯を襲っている。 した。下のがけは、さらに岩・土砂の量が多く、 た。上のがけは、岩や土砂を流し、 んで2カ所のがけや畑が崩れたことがわかっ 家一軒を壊

中に人が閉じ込められた。 三軒目のお宅では2階建ての 1階がつぶれ、

隊が駆けつけ、 翌朝、 助け出され

第四章 「伝える言葉」-体験・証言

たことは幸いだった。

寺で会合を始めた途端、外からゴロゴロとい

横浜地区に 「西日本豪雨災害碑」を建てる

被災後、数日が経つとボランティアが来てく

物や足らない道具の調達などで一夏は過ぎた。 サポートに徹した。自宅トイレを解放し、飲み れるようになり、大段さんは、ご夫婦で彼らの

よって崩れたがけや段々畑に法面工事等が行わ 横浜地区は、広島県の災害復旧応急工事に 大段さんの呼びかけもあり横浜戸主会は、復旧 一応の安全は確保された。

考えている。 この出来事を地区に伝えていくことが大切だと した斜面上に「西日本豪雨災害碑」を建立した。



横浜戸主会が建立した西日本豪雨災害碑



水尻地区

は6時過ぎだったと記憶してい雨の中、渋滞が激しかったが、

る。

自宅に帰ったの

でいた広島市を午後5時に出て帰路につく。

てきたがギリギリで車が走ってくれた。

ーンセンターへと向かった。車内に水が入っ

いた玄島市を午後5時に出て帰路につく。大奥谷武德さんは、平成30年7月6日、所用

ラックに乗り換え、自宅の100mほど上の父

避難を呼びかける消防団の声を聞き、

軽

私が今から迎えに行く」の電話娘の「お母さんが逃げないなら・純子***

が住む実家へ向かった。

実家に着き、

車を降りて家へ入ろうとした

水尻地区

車地 守さん

(平成30年当時)

車地さんは言う。

雨を見据えたものだった。 災害以前 水尻地区では毎年6月に避難訓練

れた時には、 い高齢者は、 水尻地区の老人集会所に集まり



は平成30年の災害だった。 その対応は困難を極めた。地区の特性、 の会長を務めた。その中で、最大の出来事 人ひとりをよく知るからこそできたことと、 突然の災害に、

水尻地区住民福祉協議会 会長

決めていたことは守られた毎年行っていた防災訓練、

をしていた。平成24年から始め、甚大化する豪

訓練を通して決めていたことは、 避難を呼びかける防災無線が出さ 車を持たな

た。



車地さんは長く水尻地区住民福祉協議会

た車に引き返すよう誘導していたが、 も乗せて、 まった。奥さんの運転する車で、 車地さんは地区に残り、国道で足止めにあっ 早々に安芸クリ ンセンター

れていた。 めになった人も加わり

は、災害時用に用意したノー 避難所は、4階フロアの大広間。 車地さん

胸を撫で下ろした。 区全員の無事が確認できた。このときやっと、 人。消防団とも情報共有し、 水尻地区の20世帯45人が安芸クリ ーに避難、自宅に残っているのは7世帯12 翌朝の段階で、

住宅の入居が始まった。10世帯15人が避難所を

者も多く、ここでの生活は不便も多かった。

避難所から仕事に通う人も出てきたが、

高齢

災害から2カ月経った9月9日、

坂町の仮設

退所し、安芸クリ

ンセンターの被災者は、

なくなった。一応の安心はあったが、その後も

二カ月間 夜を過ごす避難所 安芸クリーン

る。訓練には、 7月6日、車地さんは18時前、 合わせて安芸ク 毎回20数名が参加してい ンセンタ 避難勧告発令 に避難す

の放送を聞いた。集会所を開くと女性二人が集 別の女性二人

その日、安芸クリ ンセンター 00を超える人であふ は 車で足止

した。

帯の名前、 人数を書き、 直ちに安否確認を始め トに地区住民の世

めた。

手伝いが必要だと、夜をここで過ごすことに決 損傷は軽かったが、避難所で暮らす地域の人の

ーンセンターで生活することになる。

自宅の

地

П] 道がつながらないと、そこで暮らすことは難し がある。地区住民が日常を取り戻すまでをフォ 車地さんの安否確認のノ し続けた。全壊・半壊の家、また、家への

土砂の流れに、地区の奥谷武徳さんらと避難 勢いを増

ンセン

ンセンター で

ぎて、さすがに難しい・・・」と、

車地さんは言

うが、平成30年の災害とその後の復興を見届け

た感があった。

水尻地区は、また、

未来へと動き始めて

武德さんにバトンタッチした。「もう80歳を過

令和4年12月、住民福祉協議会の会長を奥谷

声掛けは続けた。

トには、その続き



車地さんが7月6日 安否確認のため記載したノート

泥次 の川と化した国道、の日の朝 呉線

武徳さんは、翌朝、 一変した水尻の風景を見

奥谷 武徳さん・純子さん

住む実家も自宅上の高台にあった。

水尻で暮らしてきた。当時87歳だった父が

徳さん、純子さんのご夫婦。 一時期を除き水尻駅のすぐ近くに自宅を構える奥谷武

水尻地区住民福祉協議会 副会長 (平成30年当時)

迎えに行く途中だった上の実家の父を

水尻川が無くなり、呉線、国道が土砂に埋ま 車20~30台が埋まっている。 復旧には時間

がかかるだろうと感じた。 住宅の被害も多かった。地区で全壊5軒を出

面を懸命に降りて自宅へと辿り着いた。

近所の人と車を乗り合わせ、

避難所の安芸ク

の肩を抱き、引きずるように土砂に覆われた斜

される様子を見ていたという。

しゃがみこむ父

の傾斜を土砂と流木が覆い、濁流も激しかっ 残し、他の斜面は崩落した。実家から自宅まで 塞がれ、乗っていた軽トラックのところだけを

土石流に襲われた。土砂がドッときて道が

た。まさに間一髪で土石流から逃れた。

家の中で様子を見ていた父は、納屋2軒が流

所で声を掛け合ったことに尽きるという。 したにも関わらず死者が出なかったことは、 近

完成した。 この災害を機に、谷の上流に砂防堰堤が3基 安全性は増したと思う

が出れば近所の人と声を掛け合い、車に乗らなしかし、こうした経験をした以上、避難指示 人も誘って、 避難することを実行してい



が来た。

その間にも「絶対、

何かある」と、

何通もメール

て」と電話があった。昼の間は仕事に出たが、

に「今回の雨は、普通の雨ではないから注意し

当日の朝、広島市に住む娘さんから純子さん

乗っていた車を残し斜面が崩壊した 7月7日朝

57

第四章 「伝える言葉」-体験・証言-

父と合流できた。

ら、娘の言葉に背中を押された。

その後、安芸クリーンセンターで武徳さん、

を置いて逃げたことに申し訳なさを感じなが えに行く!」というので、車を走らせた。二人 話があり「もう出て!

出ないなら私が今から迎

ドルを持ったまま二人を待った。娘さんから電

武徳さんが父を迎えに出た後、

車に乗りハン



小屋浦地区

出下 一教さん

小屋浦地区住民福祉協議会 会長 (平成30年当時)

害の中での行政と住民のつなぎ役には苦労表として様々な復旧に携わる。未曾有の被めていた出下さん。あの日を境に地区の代平成30年当時、小屋浦の住民協会長を務

翌朝未明、 天地川が無くなっ

を構える。

まろうと決めて いた。

連れて行くことは無理だった。 に道路は激流となり、幼い子どものいる家族を 警報を聞き、長女の家に行こうとしたが、



宅と、出下さんの家族は小屋浦の各々に住まい平地の箇所に三女、二丁目の駅近くに長女のお 7月6日夕方、まずは三女の家へ、 土砂災害の危険がある時には、長女の家に集 自の山沿いにある自宅、 同じく四丁目 大雨特別 すで

た た。 区住民福祉協議会の会長としての激務が始まっ恐ろしいことが起きた。この日から小屋浦地 途方に暮れた何から手をつけたらいいのか?

らは盗難防止のブザー

-が鳴り続けて

いた。

がぶら下がっているお宅。濁流で流された車か

埋もれて無くなっている。

1階が流されて2階

懐中電灯の明かりで見ると、天地川が土砂に

外に出たのは午前4時頃だった。

る音がする。

2階に避難すると停電、

ゴロゴロと岩が転が

ランティアセンター開設の説明を聞く 出下さんは9日、 町の社会福祉協議会からボ

が運営を手伝ってくれた。 が入ってくるとJOCA (青年海外協力協会)の方 ニーズを聞いて歩いた。 ーズを聞いて歩いた。14日からボランティア翌日から町内会長と手分けをして各住民の

やスコップを洗い、 の飲み物などに気を払いながら、夕方、一輪車に案内、午後3時までの作業中には熱中症対策 毎日朝9時からボランティアを希望するお宅 次の日のために並べる





業はずいぶんと後回しになってしまった。員で毎日の作業が忙しい。自身、家族の復旧作 国道31号の渋滞解消、 休みは雨の日だけ。 義理の息子さんも消防団 災

害ごみ収集の進捗など、 体の復旧を支えていった。 地域の道路の復旧、 一つ一つの前進が、 全

を小屋浦に設置、職員の方が毎日来てくれるよまた、7月下旬、坂町の災害対策本部の分室 うになると行政との情報共有も一気に進んだ。

そして伝えていく悲しさを乗り越え、

た。 復旧は大変なことばかりだった。 ボランティア、 住民と力を合わせ頑張っ それでも行

られた気がする。 その間は一生懸命で悲しいことも考えずにい

た。遺族の方もおられる。悲しさをどう表現し り・・・そういう区切り区切りで、言いようのな い悲しさを感じる。たくさんの方が亡くなっ でも、初盆、秋になり紅葉が目に入り、 いのか、わからない。

記録を残すため災害誌を作ることに決めた。 子ども達にも伝承できる。 を各家庭に置いてもらうことで10年20年と伝 わっていくのではないか、また、 小屋浦地区住民福祉協議会で理事会を開き、 生まれてくる 本

うになる。 とは、7月6日の災害から小屋浦の秋祭りまで たわけではないが、地域が前を向いて進めるよ の日数である。祭りの日までで日常を取り戻せ められた。 られた。タイトルの「土石流からの本には地域のたくさんの人の体験、 一区切りまでの日々だった。 思いが込

いた坂本真一さん。 平成30年、小屋浦青年団の団長を務めて 上流の砂防ダムが壊れたと後で知りました。 自分たちがナフコについた夜8時頃に天地川

させた。子ども二人を育てる小屋浦にかけ 鬼の登場や、ぶつかり合う神輿などを復活 り」では、一時廃れかけていたマッカという 災害以前にも地域の秋祭り「新宮社の秋祭

坂本真一さん

(平成30年当時)

小屋浦青年団 団長・坂町消防団 団員

目の前を遮る濁流が恨めし助けたかった命、

11

うになったのだと思います。

が橋を堰き止め、泥・流木は住宅地に向かうよ は天地川より早く起きたようで、二つの土石流 具や流木が流れてきたそうです。

大判川

の氾濫

ランダにいるとドッドッという音がしてから農

ダムが壊れた音を聞いた人もいて、

2階のベ

ました。避難を呼びかけたり、頼まれた土のう 6日夜から招集に応じて消防団の活動に入り

小屋浦地区

勢いが強くなり、避難を優先させるべきだと四 を作ったりしていましたが、道を流れる泥水の 目に住む家族を裏道を通りナフコまで誘導

ができなかった豪雨の凄まじさを悔しく思いま

で流された人などの様子を知り、

避難すること

難の途中で流された人、自宅2階に上がる途中

四丁目では多くの方が亡くなり残念です。

避

渡ることはできませんでした。

のお宅に向かいましたが、あの状況で天地川を

し、従兄弟の団員と救助要請が出ている四丁目

この夜は消防のレスキュー隊・自衛隊と合流

した。

引かないお宅へボー

7日は四丁目、

8日から9日は三丁目で水の

トで行き救助活動を行いま

今回の教訓、 早く逃げるというこ

ほぼ全て捜索しています。 した。自分は小屋浦の犠牲者の遺体発見現場を 10日からは行方不明者の捜索活動に協力しま

直接の搬出はできませ んが周囲を掘ったり土

> 砂の撤去が消防団の役割でした。先に言ったよ はなりません。 は亡くなった方の無念さも伝承していかなくて 難した家で亡くなった人もいました。自分たち うに自宅の中で亡くなった人、玄関を出たとこ ろで流された人、アパートごと流された人、避

移行しました。泥かきを繰り返す作業です 災害から2週間後、 捜索活動から土砂撤去に

思います。 た。そうして泥かきも、 り、先輩がダンプを2台、自分に預けてくれま 阪のボランティアが重機を持ち込んでくれた した。辛いとか考える間もなく日々、働きまし ボランティアセンターに人が集まりだし、 はかどってきたように

達も「災害」を人ごとのように捉えていた部分が ると思います。この災害を経験するまで、 今回の教訓は、 早く逃げるということに尽き 自分

経路の確認、逃げるタイミングを考えておくこ とは絶対に必要だと思うようになりました。 土砂災害の恐ろしさを知り、 避難場所とその

援物資がすぐ届くとは限りません。 を用意しておくことが必要です。行政からの支 そして、 ある程度の食料と飲み物は家族の分

ども達に伝えていきたい教訓です。 達の命は、自分達で守るんだということが、 るようになった小屋浦ですが、それでも、 ハード対策も整い、前より安全に暮らせ 自分 子

小屋浦地区

三登 文恵さん

小屋浦みみょう保育園 主任

そして・・・これまで見たことのない増水天地川 猛烈な雨が降る状況に保護者のお迎え

を流れる天地川は、ここで生まれ育った三登さ んでも見たこともないほどに増水していた。 の時間はいつもより早めに進んでいた。園の前 夜7時までには、すべての園児のお迎えは完



とに愕然とした。 ている、命の危険がすぐそこまで迫っていたこ 一階部分が水没。自動車が家と家の間に挟まっ

子どもの命がかかっているミルクがない!

6日夜、避難してきた人の中に生後1か月ほ

らは静止されたが、それでも必死にミルクを運 か保育園に取りに行こうと試みる。消防隊員か 建物の2階は大丈夫のようだったので、なんと だ。建物の1階は濁流が貫いていたものの幸い ある。保育園に行けば粉ミルクがあったはず 夜が明け、このままでは子どもの命の危険が 7月6日は保育園の行事として「七夕会」

め中止に。降り方が強いことから園を休むが予定されていたが、朝からの雨模様のた は「異様な雲の色だった」と記憶している。 子どもも数人。その日の空模様を三登さん

情報で覆されることになった。 は、次々と集まる付近の住民からもたらされる だが、「深夜には家に戻れるだろう」との思い 小屋浦ふれあいセンター 6、息子と二人で、避難場所に指定されている天地川を挟んだ向かいに住む三登さんは帰宅 夜7時半頃だったと記憶している。 天地川を へ向かうことにしたの

提供:済生会広島病院

60

3階へと避難の位置を変えて行った。 も浸水の危険が高まったため、避難者は2階、 の確認や名簿作成、備蓄してあった毛布や簡易 る町の職員は1人だけ。三登さんたちも避難者 トイレの準備などにあたった。やがて1階部分 いてきた。ふれあいセンターで避難者に対応す 大きな石がゴロゴロと音をたてて転がる音が響 一夜明け、窓から周辺を見下ろすと、 自宅は

> られた。 び出し、

> > カセットコンロで温めて飲ませてあげ

多くの協力を得た応急で進めた保育活動

支援ル 復興には二年をかけたが、その間も関係者の努 子ども用の砂場や遊具の設置など、 災した子どもたちを保育したいとの思いは、三 力によって保育を続けることができた。 りていた期間には、トイレなど水回りの改修、 を再開するにこぎつけた。保育の場は、隣接す 始まり、やがて小屋浦在住の職員がそこで保育 登さんたち職員の共通した思いだった。子育て 人の助けでなんとか環境を整えた。園の完全な る小屋浦小学校にも移った。小学校の教室を借 保育園の復旧はめどが立たない。なんとか被 ムのシャワーを使わせてもらうことに たくさんの

どの乳児を連れた女性がいた。聞けばミルクを 持って来ていないという。



ただ、ありがとうと、言いたい

た。サイレンが鳴り大切な時に家を離れるきた車地さんは多くの火災や災害を経験し 消防団は家庭からは役に立たない存在に見 地元である坂町の消防団で長く活動して

車地 健二さん

坂町消防団 団長 (平成30年当時)

られることも多いという。

これほどの規模で起こるとは経験のない土砂災害、

た。6時半から7時頃にかけて、各部から通報できていた。5時半、団員に非常召集をかけ7月6日夕方、役場庁舎に対策本部は既に

西側地区の土石流と火事、 横浜のがけ崩れ、

> しさ。あまりにも規模が大きすぎて土石流の怖だすと涙が出る、救えなかったということの悲 さというのを痛感した。こんな多くの人命がな り込んだ。人命というのが一番重い。助かったひたすら人命救助、消防団もそこに集中的に送 限り対応した。 消防、警察、自衛隊等と情報共有を行い可能な それが今、起きたと驚きました」 人が見つかった良かったと。 「人命救助のタイ それからの数日は町長をはじめとする役場、 「私の経験では土石流に対応したことはない。 ムリミットとされる72時間 また、今でも思い

まちを変えてしまった僅か 1 時間の豪雨が

から。それはなんとも言えない」

くなるというのは、経験したことがない

果を発揮するタイミングがなかったこと。 事態が一変してしまったので、日頃の訓練の成 この豪雨の恐ろしさは、僅か1時間の豪雨で

雨だとは思わなかった。5時の時点でもそう。 6時になった時から凄まじい雨になった。だ 「午後3時半警報の時には、そんなにひどい

動けないという感覚だったと思いますね」 かったと思う。 から、避難しようという話ができる状態ではな 雨がひどくなった時には、 もう

第四章 「伝える言葉」-体験・証言-

61

ば他人ごとのように感じていたのか。 「平成26年豪雨の教訓も、我々からしてみれ

のかなとは思う」 今、思えば、もう少し取り組む方法があっ

総頭川の氾濫、そして小屋浦の土石流。

ありがとうとみんなに、ただ、ただ、

たちが全国から集まってくれた。連携はうまく った。ありがたいという気持ちしかなかっ 「土砂撤去の作業も各地で経験を積まれた人

してい が被災者。 私たちの消防団は森浜・浜宮地区などは8割 小屋浦の消防団は22人中21人が被災

救助が最優先、とにかく人命救助。 地域が気になるのは当然のこと、だけども人命 「団員自身も家族を持つ家庭人。自分の家や

含めて活動して 家族、自分を犠牲にして40日間、 土曜日曜も

くれた」

がとうと言葉を 尽くしてくれて う気持ちが一番。 申し訳ないとい かけたいですね」 ただ、ただ、あり 「まちのために





「救援・復旧」

協力機関への感謝



災害FM放送局 内2箇所で臨時 は7月20日に町 が行われ、坂町











警察署による活動が おいて、ただちに海田

災害発生後、坂町に

を受け捜索・救助活動 域緊急援助隊の派遣 庁と37府県警から広 始められました。 広島県警察は警視

警ら活動等を行ってい や被災者支援・警戒・ 坂町でも災害警備

実施、坂町では、給水

業・個人等から支援物資が運ばれなど不足した中、全国の行政・企運びました。食料・飲料水・衣類

などの協力で船舶を使い人や物を 地区には、海上保安庁・坂町漁協

時、交通網が破壊し



自衛隊



被災者に届いた生きた情報

総務省中国総合通信局から、MCA無線機が

災害発生直後、坂町消防団の災害活動用に

供するため、坂町に臨時災害FM放送用機器 2台の貸出しと避難所へのラジオの無償配布

また、被災者へ防災・生活支援情報等を提

活動を行いました。 市4町に人命救助、行 受け坂町を含む県内8 開、瓦礫等処理などの 方不明者捜索、道路啓 24時間体制の対応も

全国から届いた船による応援、於

における主な活動は8 月13日まで続けられ います。 これら各機関の県内 ま

輸送等の活動も行って 支援・入浴支援・物資

救助・捜索・土砂撤去 各機関が坂町へ



報が急増、総動員で対応を続け 消防本部では救助等を求める通

航空小隊も出動、県内で救助活 6の府県からは

県・島根県の陸上部隊が広島県 朝までに大阪府・愛知県・山口 の応援が調整、実施され、7日 らの要請を受け緊急消防援助隊 に向けて出動しています。 した。加えて、 これら部隊の活動が実施されま 坂町内でも広島市消防局と、 同日20時30分 広島県知事か





提供:広島市消防局

(参考にした文献) 平成30年7月豪雨災害における広島県の対応 広島県危機管理監 危機管理課・消防保安課





SAKA town 坂町 災害・復興記録誌

広島病院 高島病院

救護、

医療機関の活動



へのデイサービスを実施 受け入れ障害者・障害児 支援センターの利用者を 遣し、被災した地域活動 師・看護師を避難所に派 けた方もいましたが、医 職員に災害の影響を受





提供:日本赤十字社広島県支部

広島県支部 日本赤十字社

この後、 各地で活動を行いました。 部からの応援を受け、坂町 福岡、大分、庄原等の支 学校に救援所を開設し、 り救護活動を続け、また、 ど7名を派遣。小屋浦小 医師・看護師・薬剤師な 8日 船により小屋浦に 1カ月間にわた



提供:済生会広島病院

応援保健師チ

う他県からの応援保健師チームど、被災者への心身のケアを担 が結成されました。 避難所や自宅への戸別訪問な

(写真は8月30日解散式)

第五章 「救援・復旧」

救護活動

各地が被災、交通網が分断した坂町では、救援・医療体制にも大きな打撃を受けました。 健康被害をきたした住民、通常の医療を必要とする住民に対して、各医療機関、広島県 医師会をはじめ各病院、また、国際ボランティア学生協会など多くの組織が、治療や衛生の 維持など広範囲にわたり支援を実施しました。

村上さんは火災や事故の現場において救助活動を行う 救助隊長を務める。平成29年7月九州北部豪雨の際は、 消防航空隊に在籍、空からの救助も経験した。 7月7日の小屋浦救助隊隊長が見た 動指令を受け、 7 日朝、

坂出張所(横浜中央)に着いたのは深夜だった。 たっていた。20時頃、坂町小屋浦方面への出 睡もせず、伝わる情報を、現地の地図の上 経路は越水・冠水し、安芸消防署 救助工作車に救助隊6名が乗

らヘリコプターが必要になると予想し、 トピアパークに入った。消防航空隊の経験か 覆われた広島呉道路を天応西で降り、 で想定、活動に備えて準備をした。 朝6時10分頃だった。 rとなる場所を確保して**、** 5時に出張所を出る。 泥と倒木に 小屋浦に入っ 呉ポ

広島市消防局中消防署

村上 浩崇 大手救助隊 (平成30年当時 安佐南消防署 佐東救助隊 隊長)



流木を利用し天地川を越える 提供:広島市消防局

到着した山口県の防災ヘリ

安佐南区で避難誘導などにあ

自衛隊、 通り、

道なき道を

ない。流木を利用し、 防団や住民、皆で力を合わせた。 の確認から入った。 消防はこの時、 救助活動、避難誘導を開始した。 怪我をされている人、避難されていない人 マンパワ

の担架を運ぶことは難しい 午後には三連梯子をかけたが、怪我を負った方 通常は行わない活動」細心の注意で救助を続ける。

場から2人を搬送することができた。 活動の最中、流木が寄りかかった古い水害碑を

見た。過去にもあったのかと、ふと思った。

くの困難が立ちはだかり、これまでにない経験を

ことをやった」村上隊長は、5年前の夏を思い出 たが、そこにいた人が協力して、その時、できる

隊員の命も守る住民の命を守る

66

多くの人が取り残されている、そう思った瞬間、 到着した小屋浦は、土石と流木に覆われている。 隊長として

消防団と合流、情報交換と役割分担を ンが噴き出した。天地川公園付近で、

が不足していた。消

苦労したのは天地川越え。橋が落ちて渡る術が 「危険がともない、隊員の命を守る観点からは、 対岸に救助に向かう。

要請していたヘリコプタ 山口県の防災ヘリだった。救助していたその が、 夕方、 来てくれ

7日の小屋浦は、想像を超える状況だった。 多

「各地で被害が発生し、マンパワ を割けなかっ



全国から

伝えたい



ボランティアの拠点となった坂町災害たすけあいセンター

ました。 アが坂町を訪れ、復旧・復興のために御尽力をいただき 平成30年7月の災害発生以降、多くの災害ボランティ

くのボランティアを受け入れてきました。 すけあいセンターを設置(坂町社会福祉協議会内)し、多 坂町では災害から3日目となる7月9日に、坂町災害た

した。 人になり、町内・県内はもとより全国から参加がありま その総数は令和3年3月1日までで延べ26,028

(坂町災害たすけあいセンターは平成30年12月10日、坂町 ボランティアセンター運営のサポ ボランティアセンターに名称を変更しました) し、まちが元気になることで謝意を伝えたいと思います。 す。坂町はこうしたボランティアの方々の活動に深く感謝 イベントやサロン活動の支援など、多岐にわたりました。 活動内容は、泥だし、がれきの撤去・分別、室内清掃、 今日まで続く息の長い活動をされている人たちもいま ト、被災者の心のケア、



佐渡忠和さん 広島市西区にお好み焼きの店を構える佐渡 さんがボランティアを始めたきっかけは平成 23年3月の東日本大震災。屋外でもお好み焼 きを振る舞える道具を揃え、7月に東北地方 に入る。以降、各地で自己流のボランティア 活動を行ってきた。

を回る。 東北では被害の大きかった岩手県山田町から始め各地 佐渡さんのお好み焼きはどこでも喜ばれた。そ

の後は、熊本地震など大きな災害のたび駆けつける。

になっていた。 ができた。ボランティアは情報を共有し合い活動する。 スーパ いつしか佐渡さんも皆からおいちゃんと呼ばれるよう ーボランティアの尾畠春夫さんなど多くの仲間

多くの仲間が駆けつける おいちゃんが困っている」

から連絡をもらい現地に入った。 豪雨が開けた7月7日、佐渡さんは小屋浦の知り合い

ティアに情報を発信し続けた。 信じられない光景を目にすると、直ちに仲間のボラン

と、全国から仲間が駆けつけてくれた。 情報が伝わると「おいちゃんが困っている、 行こう

9日には重機隊が到着、宿泊先がないので広島市西区







業した。

重機と2トントラックを調達、自身のお店は7カ月間休 の自宅を提供、最大で16人を泊めた。 佐渡さんも自費で

被災地の心を思うことが佐渡さんのボランティア。こ

呼びたいと、あちこちにお願いしていると、さだまさし の年、秋祭りの代わりになった小屋浦復興祭にゲストを

さん本人から電話がかかってきた。「さだですけど・・・」

の声が佐渡に聞こえて、

兄からの電話かと聞き違えたと



地域が元気になるまでのお手伝い

笑顔でいっぱいになり、 が引き受けてくれた。10月21日、小屋浦小学校体育館があって音響は専門学校の学生さん、司会は西田篤史さん さださんは出演を快諾。広島の音楽事務所の助けも 思いを込めた天地川 の精霊流し

を交わす。 き交う人が「久しぶりじゃね~元気~」と佐渡さんと言葉 のインタビューを行ったのは坂町自然災害伝承公園。 佐渡さんは小屋浦との付き合いを今も続けている。

定着するのは、ほんの一部だという。 んは活動を始めている。カワニナという巻貝を放流して被災前に見られたホタルを再び川に取り戻そうと佐渡さ 緑井で復活させた実績がある。 ば再びホタルは還ってくる。 この日はホタルの研究を行う方と天地川を見て回った。 実は佐渡さんは安佐南区の それでも続けていけ

までのお手伝いなのだと気付かされた。 になる。佐渡さんの考える復興は地域が元気を取り戻す 天地川の夏の夜、ホタルの光が灯れば地域の心が豊か

第五章 「救援・復旧」



「被災後の町民の暮らし」

困難を乗り越え復興に向かう

提供: 国土交通省 中国地方整備局

避難所での生活、 目を背けたくなるような いつもの暮らしが遠くなる。 景。



避難所となった小屋浦小学校体育館

いました。 で93日にわたり避難所生活を続けた人も 長期にわたり避難所の開設を続け、最長 住む家をなくした人たちに対しては、

支援(町有住宅敷地内)が行われました。

7月10日~

8月10日自衛隊による入浴

入浴支援ではこの他、アジアンリゾ

路も通行できなくなるなど様々な障害が 被災者を襲い不自由な暮らしが続きまし

を余儀なくされた方も多くいました。 設を襲いました。坂町内の建物被害は ,641件にも及び、避難所での生活

生じました。 が入られたことでスペースの不足などが えられています。各避難所では多くの方 なったのは7月7日早朝5時の時点で、 平成30年、 353人の方が避難されていたと考



提供:防衛省 陸上自衛隊第13旅団

土石流や浸水が坂町の多くの住宅や施 坂町内で避難者が最大と

自宅で暮らすことができた人でも、 道

11日~10月10日)、たかね荘及びたかね

ユニット設置(町有住宅敷地内/8月

・スパシーレの利用券配布、シャワ

荘こやうらでの入浴サービス等も行われ



提供:防衛省 陸上自衛隊第13旅団

災害対策派遣隊)を編成、約2カ月にわた 局等からなるTEC - FORCE (緊急 中国地方整備局をはじめ全国の地方整備 国土交通省は7月6日の災害発生後、

置き場までの運搬の一連作業を支援しまし 害土砂撤去支援チー の土砂撤去等の要請に対して、広島県災 し、道路啓開・河川土砂撤去から土砂仮 坂町内においても、坂西地区における また、中国地方整備局は広島県内各地 ムを設置 (7月18日)

啓開などにあたり、復旧へのはずみとな 河川土砂撤去、小屋浦地区における道路 りました。(8月27日に完了)

> や住宅から運び出されるなどした災害ご みと土砂の処理です。 被災後、大きな問題になったのは道路

ンに及んだと推計されています。 坂町での災害廃棄物の発生量は約13万

り各地の自治体に対し支援を行いました。

題でしたが、国、県、他自治体等の協力 置き場の確保から処分までが大きな課

も受け、進めました。 災害ごみは、一時的に各公園や小屋浦

と鯛尾に設置した海上輸送基地へ集め、 小学校に集められた後、 した後に町外に搬出。 を2次仮置き場として受け入れ、 土砂は各地区からベイサイドビーチ坂 北新地グラウン

町外の処理場へと船舶で輸送しました。

復興は泥かきから・ 各機関から支援を受ける

重機が入り

復旧が進み始める

第六章 「被災後の町民の暮らし」



8月27日坂小学校 土砂が運ばれたままの校庭で2学期が始まりました 提供:RCC中国放送



新田さん(左)隣は現在、砂防課の谷澤裕司主査 (平成30年当時 砂防課事業調整員)

新田 勉さん

広島県土木建築局砂防課 主査 (平成30年当時)

広島県砂防課で復旧・



令和元年12月完成した天地川上流の砂防堰堤 ではないか、そうお叱りを受けるこ ダムがあれば多くの命が救われたの 対策工事を担当した新田さんは「砂防 日常を取り戻すため ともあった」という。

えてくる。 不眠不休で取り組んだ仕事ぶりが見 インタビューを進めるとあの夏、

事は完成し、さらに、地域の安全性 今、坂町に安全・安心な暮ら. を高めるための工事を実施中であり、 全力で取り組んだ」進めた緊急対策工 たらしている。 し、住民の生活が再建できるように 「一日も早くまちをもとの姿に戻

早く取り戻する場民の日常を

泥色の瀬戸内海7日 空から見た

進めながら、二次災害を発生させな

砂防課では土砂・がれきの撤去を

いため応急復旧に着手。大型土のう・

だった。7月は3日から雨が降り続平成30年は6月頃から雨の多い年 き砂防課では断続的に水防体制に 平成30年は6月頃から雨

課も対応に追われる。 域に土砂災害警戒情報を発令、 6日午後6時過ぎ広島県下 ほぼ全 砂防

横断的に連携し生活に寄り添ったプラ

そのため県では多くの部署と

らの生活再建の道筋をお示しすること

「被災した坂町の皆さんに、これか

などを次々に設置した。

・センサ・

ー・強靭ワイヤ

ンを作ろうと進めた」と新田さん。

少しでも早くとの思いから昼夜関

きた。情報を集めながら翌7

夜には県内多くの箇所で災害が起

係なく業務を進めた。

被災後ほぼ1

島県は「平成30年7月豪雨

坂町(坂地

75

区・小屋浦地区)生活再建に向け 小屋浦小学校で説明会を開いた。 ードマップ」を発表、8月9日には

広島県の取組

からの復旧・復興プラン」を策定し、 進めていった。 過去にないスピード感で対策工事を さらに9月「平成30年7月豪雨災害

だったが、これまでに体験したことの

雲が低く飛行には向かない条件

ない惨禍を目にする。

広島県で行いたい小屋浦の復旧は

にえぐられた渓流、発生した土砂・

山に無数に発生した蛇の道のよう

があった。 箇所の対応の役割分担を決める必要 砂防事業を進める中で、 国と被災

に染めていた。 ら泥水が海に注ぎ、 激流がまちを覆い、

瀬戸内海を泥色

あらゆる河口か

識が県の中に強くあった」という。 路の整備が進められていた経緯もあ が計画され、 堰堤の上流に新しい砂防堰堤の設置 に復旧するのは県の仕事だという意 る。新田さんは「小屋浦を安全なまち 小屋浦には破損した石積みの砂防 用地の取得や工事用道

災害の教訓を伝承して欲し 業は全て完了 防・治山施設整備計画(緊急事業)」で 4箇所で実施、 は坂町内に小屋浦を中心に砂防堰堤 進めた「平成30年7月豪雨災害 は完成しても避難の徹底と、 急傾斜地崩壊防止対策を 令和5年12月末現在) した。 令和4年には緊急事 (一部フォ 口 砂

復興への足掛かり

に襲われる危険も残りました。 に不安定な土砂が残る等、二次災害 被災した坂町では、河川や傾斜地

事業を進め、応急的な安全の確保に 大型の土のうを設置する等、 あたりました。 渓流内にワイヤ ネット等、破壊された護岸には センサ 対策を講 や強靭ワ

国や広島県では二次災害軽減対策

ランで進められていくことになります。 フラ工事の取組は、坂町復旧・復興プ より確かな安全・安心を実現するイン







提供:済生会広島病院

応急対策

避難所での生活を続けるなど不便な

状況が続きました。 この状況を解消す るために、

第2期は10月1日から入居を開始し 所を決定し、第1期は9月3日から、 では住宅の確保に努めまし 7月19日に応急仮設住宅の建設場

央公園21戸、さか・なぎさ公園6戸、 平成ヶ浜東公園13戸を建設。 に55戸。第2次整備は、平成ヶ浜中 第1次整備は、 成ヶ浜中央公園

行われています。

宮・県営・町有住宅を活用し、 空き家、 民間賃貸住宅、 入居者

を募集しています。

74

災害で住む家を失くした方々は、

整えるなど、 相談員が巡回し、 関する不安などを抱えている方など た方、ご自宅に戻っても生活再建に 慣れない場所に生活の拠点を移 坂町地域支え合い 住民の一人一人に寄り 相談できる環境を センタ

添った支援を心がけました。 動などコミュニティづくりへの支援も また、ボランティアによるサロン活

災害から2年経過し もとの公園などに た令和2年 部

を除き解体され、 応急仮設住宅は役目を終え、



「復興」

前よりも輝くまちへ がんばろう坂町!!



78

復興プラン全体像

での期間で様々な取り組みを進めて 3月に一部改訂を行い令和5年度ま 旧・復興プラン」を策定、令和3年 からの早期復旧・復興を目指し、 平成30年7月豪雨災害 坂町復

災害からの復旧・復興を目指してい 現に向けて取り組むべき施策をまと くために3つの柱を据え施策を展開 50年後もキラリと光り輝く坂町の実 被災状況等を踏まえ、一日も早い

くらしの再建

●被災者の日常を一日でも早く

取り戻すことを目指します。

地域・行政が心を一つに全力を挙げ て早期の復旧を目指し、30年後も、 坂町 復旧・復興プランは、町民・



坂町では令和元年9月、

海川・復興プラン かんばろう!!

災害に強いまち・ 人づくり

●災害時における安全・安心の 確保に努めます。



まちの復旧・ インフラの強靭化・ まちの賑わい創出

- ●復興イベントを開催し、まちの 賑わいを創出します。



5030 くまちへ

「がんばろう!!坂町」を 合言葉に、 復興へ向けて

どでも利用され、多くの人で賑わいを

ボランティア活動を通して

~坂町とモンベル~

庫等の整備も行われました。ベイサイ 施設などがオープンし、シャワー・倉 人工海浜「ベイサイドビーチ坂」に物販 令和5年4月1日、西日本最大級の

生まれた絆

チ坂は、海水浴客やマリンス





しいロケーションに驚いたという。だったが、辰野会長は、その素晴ら も積まれたビー 国道の迂回路が通り、 チは痛々し チ坂を訪れた。 また、

第七章 「復興」

動を続ける株式会社モンベル。 ドアの知識や経験を活か

提供やボランティア活動などを行う モンベル創業者の辰野勇会長

した支援活

背に

を結ぶ。 しても注目を集めている。 力を生かした災害からの復興事例と ベイサイドビーチ坂店は、 生活の質の向上に資するための協定 は山が迫る。絶好のア 目前に美しい瀬戸内海と砂浜、 令和5年オープンしたモンベ ルドだった。 地域の活性化と町民 坂町とモンベル

整備を進める側の心配 もう大丈夫という発想



工事現場で開いた砂防見学会

国土交通省 中国地方整備局 広島西部山系砂防事務所

清隆さん

の解明、環境調査など経て、

事務所では土砂災害発生要因

地等の整備を進めている。

地区に、3基の砂防堰堤を整備

広島西部山系砂防事務所は坂

し、さらに1基の砂防堰堤と遊砂

力をいただきながら工事にあたっ 住民の方々の協力、施工会社の尽

3基の砂防堰堤 網神川上流、大判別 総頭川上流、大判別

工会社との調整を重ね、進捗管理

工事の全てにわたる。

事業は、計画の立案、

ど主要な交通網への打撃もあっ 沿いの道等に通行止めが起きるな し、国道31号、 R具線、総頭川

国が担当することになった坂地 上事用道路の設置では、 緊急的な工事として、 特別警戒区域) からイエロー ン(土砂災害警戒区域)へと移行

8,000㎡の土砂が市街地に流 の総頭川周辺では上流域から13 人したとされている。 平成30年7月豪雨により坂町 人、建物に大きな被害が発生

体的にはレッドゾーン(土砂災害 マップ上での危険度も下がり、具 こうした工事が進むとハザ

さらに、避難行動を加えること

工事を進めて実現した安全に、

開く工事なども行った。 の借地、箇所によっては山を切り

量を削減し環境負荷低減にも取 掘削土とセメントを現場で混ぜ合 り組んだ。 運搬時の騒音・振動・C○□排出 わせ、工事に再利用することで、 いう技術を採用、現地で発生した は、「砂防ソイルセメント工法」と めにも、堰堤の工事にあたって 工事用車両の通行を減らす

存型枠」も採用している。 配慮や工期短縮を目的とした「残 さらに安全を担保するため「遊 堰堤下流側の表面は、景観への

施設は上流の砂防堰堤で止められ 砂地」の整備を進めている。この

両面で実現される。

なかった細かい土砂を溜める機能

工事にはICT建設機械などD 早期完成

を目指している。 X技術も積極的に採用、

砂防堰堤への過信整備を進める側の心配、

たこと。砂防堰堤への過信も見受 難指示が出されても約4割の人が 問題なのは、過去被災した別地

整備を行っているが、 や気候変動が進めば大きく変わっ り得る土砂発生量は、雨の降り方 び起こった場合に対応できる施設 国土交通省では土砂災害が再 実際に起こ

安全と安心は、ハ 側から見ると心配になる。坂町の と言われることは、工事を進める てくる可能性も否定できない。 堰堤ができたので、もう大丈夫 ードとソフトの

完全に安全を保証することはでき はなく、坂町には依然として急峻 な山があり、多くの渓流がある。 決して、驚かせるという意味で

訴えているのはこの部分。 練や学校への出前講座に出向き、 木村さんたちが、毎年の避難訓

総頭川砂防堰堤 止められる土砂の量 約42,000m3 大判川砂防堰堤 止められる土砂の量 約35,000m3

災害による甚大な被害が発生し

で砂防堰堤、遊砂地を整備する。

砂防堰堤を建設するため、

平成30年7月豪雨に伴う土砂

た箇所において、

再度災害防止の

部、町道の付け替えも行う必要が

害を起こしたと分析されている。

きる「土砂・洪水氾濫」という被 土砂と洪水の氾濫が複合的に起

砂防堰堤は、総頭川、大判川、

流入し続け、河床の上昇が顕著に 部で発生した大量の土砂が河川に

平成30年7月、坂地区では上流

雑な形状となるため、

とができる。施工事例が少なく複 深くとり、多くの土砂を貯めるこ

どを取り入れて計画を進めた。

–ル水理模型による実験結果な

緊急的に坂地区に計画され

めることになった。

区・横浜地区を、中心に整備を進 省は坂地区を、広島県は小屋浦地 各機関との調整を通し、国土交通 せた。(平成31年4月)

坂町の土砂災害対策については

砂地」の整備を実施する。 濫」が発生したと分析、「遊流に加えて「土砂・洪水氾

応を行っている。

「遊砂地」は、川の流路を広く

て「遊砂地」の整備についても対

「土砂・洪水氾濫」への対応として

広島西部山系砂防事務所では、

これまでの砂防堰堤の整備に加え

平成30年7月豪雨では土石

島西部山系砂防事務所を開所さ 整備を行うため国土交通省は、広

主なインフラ整備

坂地区①



提供:広島西部山系砂防事務所



提供:広島西部山系砂防事務所

主なインフラ整備

坂地区②

主なインフラ整備 水尻·亀石地区



SAKA town 坂町 災害・復興記録誌



上水落川 (河川) 提供:広島県砂防課

総頭川の整備 (河川と歩道部分)



大量の土砂・流木で壊れた橋や道路を復旧し、崩壊し裾に大きな被害を与えた急傾斜地に崩壊対策工事などを行いました。

進めた復旧事業 坂地区 総頭川(砂防堰堤) 総頭川(下流砂防堰堤・遊砂地) 総頭川1号線

主なインフラ整備

横浜地区





提供:広島県砂防課

進めた復旧事業横浜地区 横浜西一丁目(急傾斜地対策)

急傾斜地崩壞対策 R1.10完成

安全・安心なまちを目指す。 その基盤となるインフラの整備を進めました。

平成30年7月豪雨災害 坂町復旧・復興プラン(令和元年9月)より

力ある「まち」となるために、 入口の減少は、地域の歴史や伝統文 災害を機に生活基盤など、 剤造的な復興を目 人口が減少しています きっかけ 被災地区での 以前より災害に強いまちを実現しました。

た人口を取り戻す

っために、

そこで、

流出

も安全・安心なまちを目指

50年後もキラリと光り輝く、

まちづくりを進めていきます。

住宅の再建、 早急に行わなければならない りるまちにするためにりキラリと光り輝き、 姿に戻すだけではな 坂町がより として改善を L指しま 単なる復 今まで

> 着が失われ、さらわいや地域への愛により、地域の賑 などのおそれがあ 化・伝統行事の くことが考えられ このこと



亀石川2 砂防堰堤



提供:広島県砂防課

水尻川支川3 砂防堰堤設置 R4.8完成 提供:広島県砂防課

主なインフラ整備

小屋浦地区②







※各工事写真の右下は工事箇所名 (位置はおおよそのものです) 出典:国土地理院撮影の空中写真 (平成30年7月撮影) を加工して作成

提供:広島県砂防課



町道天地川1号線 歩道の整備

明落した二つの橋を復旧、 川の護岸と川底の整備も進め川の水を下流に流しやすくしています。 道路、歩道の復旧も進め、 安全・安心なまちづくりに



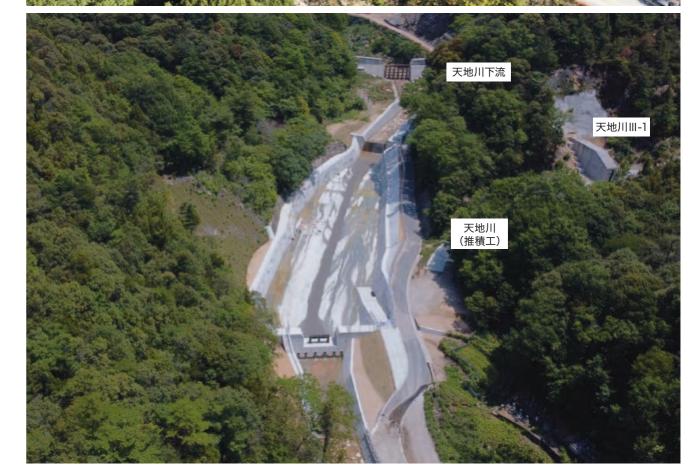
天地川 本谷橋







天地川上流 R1.12完成 天地川上流



小屋浦みみょう保育園 園長

みみょう保育園の園長に就きまし 薫さんは、令和2年春に、小屋浦 いを共有しています」と話す柳楽 なってほしいと、職員みんなで思 り、たくさんの人が集う場所に

薫さん

災害発生当時、広島市内の保育

危ぶまれた園の再建

新園舎が完成し、 令和2年10月、2年3カ月ぶりに たが、保護者たちの強い願いを受 2 m近い土砂に埋もれ全壊した 園は建て替えを決めました。 一時は存続も危ぶまれまし 日常を取り戻し

できる場所としての機能を持ってし、必要に応じて地域の人が避難 での道のりを知る職員や子どもた 保育に関わる期間は短かったもの います。柳楽さんは、 3階建てに生まれ変わった園舎 「被災当時の苦労や、 最上階に備蓄品などを常備 新園舎の完成の喜び 仮園舎での





の心情に思いを寄せます 自分の命を守るために

「新しく生まれ変わったこの園

地域の復興のシンボルとな

域の防災士による防災教室を開 覚えていく。また、年に一度、 訓練では、『地震』『津波』『水害』 の大きなテーマ。起こりうる災害 就学前の子どもたちに、どうやっ れの避難方法をゲ くつものパターンに分け、それぞ 『火災』など、起こりうる災害をい カ月に2~3回実施している避難 も、水害だけとは限りません。 て防災意識を植え付けるかは、 この地域で暮らし、ここへ通う ム形式などで

さん自身も、被災者の一人です。 園に勤務していた坂町在住の柳楽

> ミュレーションする取組を続けて 屋浦小の児童らとともに学び、シ

わからない
 災害はいつ起きるか、

愛する気持ちを持った子ども達を に行動をとれる、そして、地域を 学習する将来のために、保育園で せなくなることの心配もありま の取組がその下地になり、 す。「いざという時、自分はどう 平穏な毎日に慣れて、行動に移 ればいいのか」を、より深めて

新しい暮らし、 はじまる



业 北新地二丁目住宅1号棟(21戸)

に全85戸の住宅を建設しまし

なった方々のために町内6箇所

の被害を受けて、

住む家のなく

らすこともできます。 設住宅とは異なり、

坂町では、平成30年7月豪雨

して無償提供される応急的な仮

恒久的に暮

被災直後に一時的な住まい

た。(令和2年3月完成)



坂東三丁目住宅(2戸)



北新地二丁目住宅2号棟(23戸)

方自治体が整備する賃貸住宅で

自宅を失った被災者向けに、地

災害公営住宅は、災害などで



横浜中央二丁目住宅(4戸)



坂東二丁目住宅(4戸)



小屋浦一丁目住宅(31戸)

令和2年12月、竣工した「たいびエコ センター」、被災した「リサイクルセン ター坂」に代わり、町内の資源ごみ 等の中間保管施設として稼働してい

「坂町災害伝承ホール」

(坂町自然災害伝承公園内)

場として利用されています。 ました。町内はもちろん遠 来に伝承し、風化させない 災害から得られた教訓を将 方からも防災教育や研修の ための取組として建設され (地域住民の方の津波一時避 令和4年4月竣工、豪雨





横浜地区

横浜西一丁目



対策を行っています。 島県の応急対策工事によ 崩れが発生しました。広 崩れが発生しました。広





水尻地区

水尻地区

水尻駅

上水落川



水尻地区でも渓流が崩壊し、 大量の土砂はJR呉線の付 近で1m程度堆積しました。 渓流上流に3基の砂防堰堤 を設置。復興も進み、ベイ サイドビーチ坂には商業施 設がオープン、また、広島 呉道路4車線化事業が始 ミコースのでは、







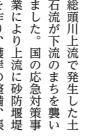
坂地区 総頭川上流

H30年7月

坂地区

坂公民館前

石流が下流のまちを襲い 石流が下流のまちを襲い ました。国の応急対策事 業により上流に砂防堰堤 を作り、護岸の整備、張 出し歩道の補修・整備を





ます。
ます。
ます。









復旧・復興の足跡①

平成30年7月から5年が経過した坂町の様子です。風景はど のように変化したでしょうか。

災害を乗り越え、日常を取り戻した様子がわかります。 ※復旧時の写真・情報は、おおよそ令和5年度末のものです





90

小屋浦地区

坂町自然災害伝承公園



小屋浦四丁目付近では、 下地川は土砂で埋まり川 の形を失いました。大量 の堆積物は、各機関・ボ ランティア等、多くの 方々の支援があり、秋頃 にはほぼ全てを撤去する ことができました。







小屋浦地区

宮前橋





亀石地区

H30年7月

H30年7月

サービスステーション付近



坂町







復旧・復興の足跡②

小屋浦地区

天地川上流



等を作り、安全・安心を高めて
「現堤、土砂の流出を防ぐ堆積工
「販場県はこの箇所に3基の砂防
広島県はこの箇所に3基の砂防
広島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県はこの箇所に3基の砂防
「大島県は、下流の
「大







「伝承」

伝えていく、日々の備え、命の大切さ

災害に強いひとづくり

を取得した。 「防災士の講座で最初に言わ

難行動の徹底につながってくる」 守れない人は、人を守ることはでくださいということ。自分の命を 連帯を深めること、そのことが避 きない」「そして地域をよく知り、 たことは、まず自分の命を守って 地域の連帯を深めていくこと

ある。 た。その次の年も規模縮小。それ平成30年は祭りを開けなか 小屋浦地区には絶好の機会が それは秋祭りだ。



多くの人が力を貸してくれた。 助け出された。その後の復旧には ごと浸水し、8日夕方にボ 小屋浦三丁 自に住む木村雄一さ

ンスだった。

ち早く参加し、 令和元年には資格

ども達の小屋浦をつ

くって

秋の空に賑やかな

小屋浦の地域を守っていく、

歓声が続いていた。

第八章 「伝承」

ん。平成30年の災害では1階が丸

お世話になった人たちに何か恩 トで

した。 返しをしたいと、次の災害に備え て防災士の資格を取ることを決意

残った者は頑張って、まちづくり

「地区の人口は減少したが、

坂町が進める防災士の講座にい

年ぶりに本格的な祭りを開くチャ コロナ・・・。 令和5年は

直したい」 どけてしまったが、 がりが強いところ。災害で少 「小屋浦はもともと地域のつ もう一度結び

準備を進め、この年、昔のままの を進めないといけない」 青年団、そして木村さんがリ ーを務める小屋浦防災士会は

祭りを開くことができた。

追い回す方になる。 ども達は泣きじゃくり助けを求め 追い回す小屋浦の秋祭り。幼い子 れないが、その子らも数年後には る。子どもには迷惑な祭りかもし マッカという赤鬼が子ども達を 木村 雄一さん 小屋浦防災士会代表

援センター。 行いました。 援』に力を入れている。 極的に出向く『アウト 「平成30年の災害時、 地域高齢者の包括的、継続的な

重要です。「防災・減災」で大切な が何を学び、実践していくのかが 出来事でした。その中で私たち 「あの災害は、まちにとって辛 住んでいた地域を離

「オレンジリング」を手に

木下 健一さん 坂町地域包括支援センター 生活支援コーディネーター



を行っています。

消防備品の購入や施設の復旧

河川監視カメラの設置、

SNSで確認できます。

イムで町のホームペ

河川監視の映像はリアルタ



河川監視カメラの設置

平成30年7月豪雨の教訓を



戸別受信機の無償貸与

災害に強いまちづくり

避難をしない心理要素 正常性バイアスとは

外出したくないと思うかもしれま

償貸与、

屋外スピー

カーの増

防災行政無線の戸別受信機無 りたかった」などの声に応え、 た」「早い段階で川の状態が知 の防災無線が聞こえなかっ を行いました。「豪雨の中、 活かし地域防災計画の見直し

甘さを感じると思います いるのを知ると、その人の判断のが、危機が迫っても避難しないで 遠くに住む親戚や友人

れの経験から、自分は避難しなく思ってしまう、これまでのそれぞ 関わらず、避難をするべき人たち手元に届くようになっているにもす情報は、より正確に細やかに、 観測機器や クの発達によって、避機器や情報通信 ネ

災害から自分の命を守ること

なかったり、なにかと理由をつけは大丈夫だろう、と思って何もし て行動しなかった経験はありませ 確かに豪雨のときは、できれば

冷静な

が避難しない

動を起こしましたか。きっと自分とがありますか。具体的に何か行 きに、避難所に避難を検討したこ みなさんは、 特別警報が出たと

まう人が多くいます。ても大丈夫だろうと、 自分は大丈夫だと 安心してし 避難を促 り。災害時にスマホは大活躍するえてくれたり、励ましてくれた額、必要な情報を教摘してくれたり、必要な情報を教 でしょう。 人々と、判断の甘さを指摘しあう逃れることは困難です。周りの追分一人では正常性バイアスから バイアスと呼ばれます。
に判断してしまう。これが正常性 ことが大切です といっても過言ではありません。 は、この正常性バイアスとの戦 ざ自分のこととなると危機が迫

ミュニケー 手を貸す。

掛け合う、困っている人がいたらているからです。逃げる時に声を町内の人こそ、同じ危機に直面し くの他人が頼りになります。 には、遠くの親戚や友人より、 しかし、避難するとなったとき -ションは、このような同じ町内の人同士のコ 近



「正常性バイアス」とは誰も が持つ心の動きで時に避難 活動の妨げになると言われて

その仕組みを広島大学大学 院の匹田准教授に聞いてみ

匹田 篤さん

(広島大学大学院 人間社会科学研究科

判断ができるのにも関わらず、

大丈夫だろうと楽観的

住んで良かったと思える坂町へ

員は住民が地域で孤立しないよ う、支援の必要な人のところに積 ケア活動を行う坂町地域包括支 木下さんと6人の職 私たちは - チ支

ないようにと力を入れました」 れ、別のところで暮らしはじめた 社会福祉士など)から支援活動を れぞれの立場 (保健師・看護師・ 支援が必要な人の元に向かい、そ 人もいます。そういう方が孤立し

一人ひとりが地域とつな

のです」

子どもたちも地域を見守っている

財産になるはずです」 が、将来の暮らしにとって大きな からそういうマインドを持つこと がっていること。特に子どもの頃

子どもたちを見守っていますが、 事例もあります。 その方への支援が始まったという 頭先生に伝えてくれたおかげで、 子がおかしいと、子どもたちが教 に高齢者の見守りを行っている。 ング」を装着してもらい登下校時 ルに認知症理解者の証である「リ 町内の小学5・6年生のランドセ 齢者に向けた地域の見守り活動。 「オレンジリング」は、認知症の高 「いつも会うおじいちゃんの様 木下さんが中心となり始めた 高齢者の方々は

設置を支援した小屋浦コミュニティハウスでの喫茶

SKY協働センターが主催したマルシエ

小屋浦 SKY協働センタ

は豪雨により

のため様々な活動を企画、 のまちづくりをテーマに、地域活性 大きな被害を受けた坂町で、復興後

SKY協働センター(特定非営利活動法人)復興後のまちづくりに取り組む

えるまちへ

(小屋浦)、Yokohama(横浜)と町内 SKYは、Saka(坂)、Koyaura

S

ながっているという思いが込められ と、地区は異なっても空(sky)はつ の3つの地区の頭文字からとった。3 つの地区が協働してひとつになるこ 主な活動として旧災害公営住宅で

や学生ボランティアも参加している。 社会福祉士の資格と経験を持つ住民 企画。交流会には、町内の看護師や もが参加でき楽しく過ごせることを 草花の寄せ植え、軽スポー 毎月開催しているサロン交流会等 30年、消防団として、まちの復旧活 入居者と考え、菓子や飾り物づくり、 代表を務める大迫雅俊さんは平成 ・ツなど、誰

りにつながる。

びつきを深め、災害に強いまちづく 緒に楽しく過ごすことが、地域の結

動等にあたり、その後、ボランティア として応急仮設住宅でのコミュニ 人による交流の場づくりの必要を感 ーションづくりなどに参加、坂町の

つなが、 な町、c

かっている。3つの地区は

協議会でボランティア活動をサポ 流の担い手として活動している。 トした。今は立場を変えて、地域交 副代表の加藤直美さんは社会福祉

地域の結びつきを深めるイベントを選して ベントを通して

支援して

を広げている。 しいコミュティづくりへと活動の領域 SKY協働センターの存在は、新

NPOの拠点「スカイハウス」は、

を通し、子どもから高齢者までが、 会するサロン交流会の場を目指して 開放する他、様々な年齢層が一堂に 子ども達が楽しめる場所として毎週 開催するマルシェ、こども祭りなど

高齢者も子ども達も、キラリと光り 輝くまちを目指している。 坂町の人による坂町のまちづくり、

災害復興の中で生じる課題と向き

て解決していく、その役割の一翼を 合い、町内の様々な人たちと協働し SKY協働センタ

____ 坂町立小屋浦小学校 香川校長

第八章 「伝承」

令和5年度の5年生が作った防災カルタ

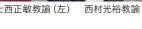






令和4年度の5年生 が作った防災紙芝居

小屋浦小学校 平成30年には避難 所、臨時の保育園、 校庭は土砂の置き 場所にもなった



この学校の使命語り継ぐことは、 屋浦を大切に考える機会を創出して ができるか』をテーマに、ふるさと小 災を含め『地域を笑顔にするために何 ず、保育園児や地域のお年寄りに対 年、その形は様々だが、学校に限ら しても発表の場が設けられる。 る。 やがて6年生となった児童は、防 小屋浦小学校に通う子どもたちが

防災、それは

令和5年度に創立150周年を迎えた小屋浦小 学校は、地域に愛され、多くの住民が巣立った小 学校だ。創立記念の式典を迎え、校長の香川さ

んがあらためて思うのは「地域の皆さんが、いか にこの学校に愛着を持っているか」ということだ。

> 啓発に取り組む。3年生から「防災」 忘れず、児童発信による防災意識の

に特化した授業に臨み、伝えるため

の様々な手法を凝らす。

災害の事実や、当時を知る人の言

小学校はないこれほど地域に愛される

小屋浦小学校では、災害の記憶を

坂町立小屋浦小学校

地域を愛する気持ち

れから先もずっと、助け合いの気持 担うのは、この地域の未来であり、こ ちを醸成することが必要だ。これま

組みは、紙芝居、

防災カルタと、

毎

は、4年時には、取り組んだ成果をい 葉などの情報をインプットした児童

にし、5年時に発表する仕組みだ。ハ かにアウトプットするかを考えて形

-ドマップの作製に始まった取り

輩へと伝える役割を担ってくれるは になる。地域に愛される小学校には、 代へのバトンとして継承していくこと どめている子どもたちも、やがては卒 記憶と防災意識を伝承するのは、こ きっと多くの卒業生たちが訪れ、後 その時は、伝え聞いたことを、次の世 はやがて、姿を変えることを余儀な 業していく。児童から発信する取組 現実問題として、災害時の記憶をと いを共有しています」と言う。だが、 の学校の使命であり、児童もその思 くされ、転換期はやってくるだろう。

での取組を通じ、香川さんは「災害の

98

令和3年3月

令和4年4月

第八章 「伝承」

99

平成30年7月 平成30年7月豪雨

7月 坂町災害たすけあいセンター開設(平成30年12月8日まで)

9月 応急仮設住宅入居開始(令和5年2月全世帯退去)

10月 坂町地域支えあいセンター開設(令和4年3月まで)

令和元年5月 防災行政無線「戸別受信機」の貸与開始

9月 平成30年7月豪雨災害坂町復旧・復興プラン策定

令和2年3月 坂町災害公営住宅完成







4月 新型コロナウイルスに対して緊急事態宣言が出される 12月 たいびエコセンター完成



坂町水害碑建立



5月 坂町自然災害伝承公園完成 (小屋浦公園の別称)



4月 坂町災害伝承ホール開館

坂町総合防災訓練

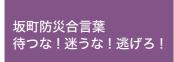




10月

河川監視カメラ WEB

坂町防災合言葉決定



令和5年3月 坂町文化財倉庫完成



Milis > !!!

扬切

復興への歩み



広島大学防災・減災研究センター センター長 坂町土砂災害対策有識者委員会 委員長

が必要になった時にも、

とても役に立

られます。この「つながり」は、防災 代を超えて人々が協力しあう姿が見

つものです。

経験者から未経験者へ、

海堀 正博さん

名の由来、

地域の成り立ちや言い伝

若者にとってはとても役に立つ情報 えなどを伝えることが、未経験者や

ていけば良いのです。

地域をよく知る世代からよく知らな

たとえば、過去の災害や地



崩れることもあります。

流木や巨石

強い地震動に見舞われた時には山が

混じりの土石流となって流れ下るこ

ふだんは自然の恵み

坂町の財産、 人と自然

産そのものです。 なものです。 青々とした海、 ンの巨石が織りなす風景、見事 この恵まれた景観は、美 一部であり、 ただ、異常な大雨や 緑豊かな山、 坂町の財 コアス

つながりの中で 世代を超えた 真の支え合いにつながります。

生し、残念ながら多くの命が失われ る深刻な災害となってしまいました。 平成30年7月豪雨の時には、坂 もたくさんの崩壊や土石流等が発

ができていませんでした。 私たちは今、 この経験した無念を 活かすこと

が必要になります。

幸い、坂町では地域の行事が大切

が守れるような生活の場を築くこと

を享受しつつも、 ともあります。

いざという時には命

にされています。

伝統的な祭りや催

しでは、子どもからお年寄りまで世

将来に伝えて、

れていたにもかかわらず、 を石碑で私たちに伝えようとしてく の人も経験していて、その時の無念 同じような大きな災害を昔

悲惨な災害にせずに済むように、み 使いこなす若者世代からは使うこと います。石碑や災害誌や語り部によ にさらされることがあっても、二度と が難しい高齢者世代へ、新技術の使 んなが命を守れるような坂町になっ る伝承などを世代を超えたつながり んなに命を守ってもらいたいと願って い方や情報の中身を教えてあげれば、 仮に再び自然の猛威 いざという時にもみ 新技術を普通に





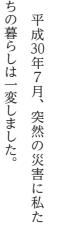












ころでは土石流の被害など、町中が大 きな痛手を負いました。 豪雨に襲われた次の日の朝の光景。 あるところでは浸水の被害、あると

大切な人も失いました。住み慣れた

絶望の淵で、多くの人が手を差し伸

家を失った人もいます。 ア、全国から贈られたあたたかい支援 べてくれました。 国をはじめとする行政、ボランティ





り絞り、歩き始めました。 まちには、まだ、災害の爪痕も残り 私たちは、絆を感じながら、力を振

のは、町が一丸となり、取り組んでき た成果でもあります。 それでも、今日、日常を取り戻せた これからも、より良い坂町にするた

めに歩みを続けます。













第八章 「伝承」

坂町 災害·復興記録誌 「伝承」

平成三〇年 七月の記憶

(取材協力・写真提供) 国土交通省中国地方整備局 国土交通省中国地方整備局 国土交通省国土地理院 国立研究開発法人 防災科学技術研 防衛省陸上自衛隊第3旅団 広島地方気象台 株式会社パスコ 国際航業株式会社 NEXCO西日本中国支社 広島県砂防課 海田警察署 広島市消防局 安芸地区医師会 日本赤十字社広島県支部 済生会広島病院 中国放送 中国放送 中国放送 中国放送 中国新聞社 坂町住民の皆様

【発行日】令和6年3月 【発行元·編集】 坂町

〒731-4393 広島県安芸郡坂町平成ヶ浜一丁目1番1号 【制作】株式会社RCCフロンティア

本誌の記事・写真などの無断転載を禁じます。



町の鳥 メジロ

防災の大切さを伝承していきます

坂町防災合言葉

令和4年10月決定

最優秀賞

「待つな! 迷うな! 逃げる!」

坂中学校3年 宮脇 叶さん

坂町 災害·復興記録誌 「伝承」

平成三〇年 七月の記憶

